

**平成30年度大学教育再生戦略推進費
「大学の世界展開力強化事業」計画調書
～ 米国等との大学間交流形成支援 ～**

[基本情報:タイプA]

1. 大学名 <small>(○が代表申請大学)</small>	千葉大学				
2. 機関番号	<small>代表申請大学</small>	12501			
3. 主たる交流先の相手国	米国				
4. 事業者 <small>(大学の設置者)</small>	ふりがな とくひさ たけし (氏名) 徳久 剛史		(所属・職名) 学長		
5. 申請者 <small>(大学の学長)</small>	ふりがな とくひさ たけし (氏名) 徳久 剛史				
6. 事業責任者	ふりがな わたなべ まこと (氏名) 渡邊 誠		(所属・職名) 理事(教育・国際担当)		
7. 事業名	【和文】 COILを使用した日米ユニーク・プログラム				
	【英文】 Japan-US Unique Program by COIL (COIL JUSU)				
8. 取組学部・研究科等名 <small>(必要に応じ[]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[]書きで全ての部局名を記入。)</small>	<small>学問分野</small>	<input type="radio"/> 人社系 <input type="radio"/> 理工系 <input type="radio"/> 農学系 <input type="radio"/> 医歯薬系 <input type="radio"/> 看護・医療系 <input checked="" type="radio"/> 全学 <input type="radio"/> その他			
	<small>実施対象 (学部・大学院)</small>	<input type="radio"/> 学部 <input type="radio"/> 大学院 <input checked="" type="radio"/> 学部及び大学院			
全学[国際教養学部・文学部・法政経学部・教育学部・理学部・工学部・園芸学部・医学部・薬学部・看護学部・人文公共学府・教育学研究科・融合理工学府・園芸学研究科・医学薬学府・看護学研究科]					

9. 海外の相手大学			
	国名	大学名	部局名
1	米国	アラバマ大学	全学
2	米国	シンシナティ大学	全学
3	米国	ニュースクール大学	全学
4	米国	ストーニーブルック大学	全学
5			
6			
7			
8			
9			
10			

10. 連携して事業を行う機関(国内連携大学等)					
	大学等名	取組学部・研究科等名		大学等名	取組学部・研究科等名
1			4		
2			5		
3			6		

(大学名:千葉大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

11. 「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL

<http://www.chiba-u.ac.jp/general/disclosure/teaching/index.html>

12. 本事業経費 (単位:千円) ※千円未満は切り捨て

年度(平成)	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	合計
事業規模 (総事業費)	28,000	25,500	23,250	21,225	19,402	117,377
内訳	補助金申請額	25,000	22,500	20,250	18,225	102,377
	大学負担額	3,000	3,000	3,000	3,000	15,000

13. 本事業事務総括者部課の連絡先

部課名			所在地		
責任者	ふりがな (氏名)		(所属・職名)		
担当者	ふりがな (氏名)		(所属・職名)		
	電話番号		緊急連絡先		
	e-mail(主)		e-mail(副)		

(大学名:千葉大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

質の保証を伴った交流プログラムの目的と内容 【1ページ以内】

① 交流プログラムの目的・概要等

【交流プログラムの目的及び概要等】

本プログラムは、COIL を利用して、米国でしか学べない授業を日本で、日本でしか学べない授業を米国で実施 することで、新たな学びの興味を開眼させ、日米双方の学生の留学を推進し、多様な分野で活躍する人材を育成するものである。本プログラムは、以下の3方針で実施する。

(1) 12+12のユニーク・プログラム COIL JUSU(Japan U.S. Unique)Program の実施

本プログラムでは、この新たな学びの科目を COIL JUSU プログラムと呼ぶ。本事業では、米国の4つの大学と連携し各大学から3プログラム、合計12のプログラムを千葉大学に提供してもらい推進する。逆に、千葉大学からも同数の12のプログラムを提供し実施する。合計で24のプログラムを5年間で設置し、終了後も継続的に実施していく。米国の大学から提供されるユニーク・プログラムは、例えば、シンシナティ大学と地元企業の P&G とが強力に連携した化粧品学を、薬学部や工学部の学生を中心に展開する。さらには、自国の強みを学生同士が教えあ

うようにすることで、高度なアクティブ・ラーニングで実施する。このように、4つの大学の各領域で実施する。一方で、千葉大学からは、国立大学で唯一の国際教養学部、看護学部、園芸学部の日本独自のユニーク・プログラムを提供する。例えば、国際教養学部からは、能・狂言などの古典芸能の授業を COIL 型にして提供する。看護学部からは災害看護、園芸学部からは植物工場と、いずれも千葉大学の誇る日本ならではの、ユニーク・プログラムを提供する。

提供するプログラムは、学部の3-4年生を対象とした 300-400 番台のプログラムとし、将来、双方の大学に留学や長期の交換留学の足がかりとする。平成31年度には、500 番台(大学院レベル)を開講する。

(2) Smart COIL で新たな学びのスタイルを展開

千葉大学では、平成30年度より、全学の「国際未来教育基幹イノベーション教育センター」でどこでも学習できるスマート・ラーニングで、e-Learning、ビデオ・コンテンツ、インターネット授業、ソーシャル・メディア利用などにより、キャンパス外でも学習できる環境を構築していく。これは、平成29年度に開設したバンコク・キャンパスでも、日本と同様の学習環境を実現することを目指すもので、海外に留学していても、必修科目などを履修できるようにするものである。本プログラムでも、このスマート・ラーニングを利用して、どこでも、いつでも学べるプログラムとする。各プログラムは、1/3 をビデオ会議での双方向学習、1/3 を各大学でのアクティブ・ラーニング、1/3 をビデオによる学習とコンポーネント化し Smart COIL として展開していく。

(3)COIL +VIP(+ Volunteer, Internship & Professional Study) Program の実施

COIL に「ソーシャル・ラーニング」をプラスすることで、その学習効果を数倍に引き上げる。具体的には、COIL 参加学生から上位 5%程度の優秀な学生を選抜し、米国人学生は日本で、日本人学生は米国でボランティア、インターンシップ、実践学習(臨床的・クラークシップなど)から1つを選び実施する。実施期間は、日本人は 2-3 月、8-9 月、米国人は 6-8 月と、双方の長期休暇期間を利用する。この VIP Program に参加して終了した学生には、事前学習・事後学習を含め 6-8 単位とサーティフィケートを付与する。

以上の3つの「ユニーク・プログラム」「スマート・ラーニング」「ソーシャル・ラーニング」の特徴のもと実施する。

【養成する人材像】

■「未来の雇用を創造できる人材＝国際教養学大学院セルフ・デザイン・メジャー専攻」で新たな人材育成

本事業では、ユニークなプログラムを提供し、そこから新たな学びの興味を開眼させる。各大学のユニークなプログラムを学習することで、自分の専門にとらわれることのない学びを実現できる学生を育成する。さらには、大学院でより深い学びを実現し、自分自身でニュー・メジャーを創造してもらいたいと考えている。このニュー・メジャーを創造することができる国際教養学大学院を事業期間中に設置し、未来の雇用(仕事)を創造することができる学生を、文理混合のセルフ・デザイン・メジャー専攻で育成する。新たな概念の大学院設置で、日本人だけではなく外国の学生も育成する。

【本事業で計画している交流学生数】 各年度の派遣及び受入合計人数(交流期間、単位取得の有無は問わない)

(単位：人)

平成 30 年度		平成 31 年度		平成 32 年度		平成 33 年度		平成 34 年度	
派遣	受入								
15	15	20	20	25	25	25	25	25	25

② 事業の概念図 【1ページ以内】

COILを利用した日米ユニーク・プログラム

「未来の雇用を創造できる人材」を育成

平成32年度設置予定 国際教養学大学院セルフ・デザイン・メジャー専攻で新たな人材育成

育成する人材像＝大学院で学びを広げ自分の専門にとらわれないニュー・メジャーを自分で創造できる

Smart COILで新たな学びのスタイルを展開

Smart Learning(どこでも学べる) + COIL(オンライン国際共同学習)

e-Learning、ビデオ・コンテンツ、インターネット授業、ソーシャル・メディア利用などにより、キャンパス外でも学習できる環境



米国4大学でしか学べない科目



12 4つの大学の特徴ある領域でCOILを実施
ユニークなプログラムで日本人学生を留学に誘う Universities

University of Alabama



社会教育

- (1) Social Education
- (2) Civil Study
- (3) Global IPE

University of Cincinnati



化粧品学

- (1) Cosmetic Science
- (2) Business
- (3) Landscape

The New School



ビジネスデザイン

- (1) Business Innovation
- (2) Design Thinking
- (3) Service Design

Stony Brook University



エンターテイメント

- (1) Art & Entertainment
- (2) American Literature
- (3) Wellness

COIL JUSU (Japan U.S. Unique) Program

学生が相互に教えあうことでより高度な国際共同教育を実現

看護学部

- (1) 災害看護 緊急時看護
- (2) 高齢者看護 高齢者医療
- (3) グローバルIPE
- (4) 医工学 医療システム

園芸学部

- (1) 完全人工植物工場
- (2) 造園学
- (3) 都市緑化 環境問題
- (4) イメージ・センシング

国際教養学部

- (1) 能・狂言 日本古典芸能
- (2) 神と日本文化
- (3) 農業の6次産業化
- (4) コミュニティ再生ケア

医学部・薬学部・看護学部・理学部・工学部・園芸学部・国際教養学部・文学部・法政経学部・教育学部



千葉大学(日本)でしか学べない科目を実施

CHIBA UNIVERSITY



千葉大にしかない授業を提供
国立大学唯一の看護学部・園芸学部・国際教養学部が先導



Volunteer



ボランティア
国際機関WHO JICA
千葉県公共機関

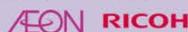


米国企業でのインターンシップ予定 P&G アラバマ大学 ベンチャー系企業 など

Internship



インターンシップ
流通業 IoT企業
農業+6次産業



Professional Study



プロフェッショナル・スタディ
附属病院・圃場
国立歴史民俗博物館



COIL +VIP Program

Volunteer
Internship
Professional Study



ソーシャル・ラーニングをCOILにバインドして実施
COIL+VIPのフルプログラムに日本人学生25人+米国人学生25人=50人参加予定

教育の質を保证するための6つの特徴的な戦略

- (1) 教育課程とラーニング・アグリーメントによる相互保証
- (2) マイナー「国際日本学」の拡大
- (3) 6ターム制の利用でスムーズな派遣・受入の実施
- (4) セルフ・デザイン・メジャーへの発展
- (5) 大学院マイナー・プログラムでの研究ユニット招聘型授業の実施
- (6) ダブル・ディグリーへの発展

③ 国内大学等の連携図 【1ページ以内】

本プログラムは、米国のユニークな4つの大学であり、かつ、総合型大学と連合型大学という異なる運営を行なっている大学と、千葉大学が双方のユニークなプログラムを提供することで、実施するものである。千葉大学では、すべての学部および大学院を対象としているとともに、日本の大学において唯一の園芸学部、日本で一番古い看護学部、日本の国立大学で唯一の国際教養学部などオンリーワンの学部を主体に COIL のプログラムを構築するものであり、他の大学には同様のプログラムが存在しないため、単独での実施の構想に至っている。

また、本プログラムは千葉大学に、国内大学初の文理混合の国際教養学大学院セルフ・デザイン・メジャー専攻の修士の学位プログラムを設置するものであり、プログラムが安定後に広く学外に広報し、そのメリット等を踏まえ普及することを考えており、プログラム構築のために、単独で実施したいと考えている。

なお、プログラムの2年目以降は、プログラムを国内に解放し、現在連携している国立六大学や千葉圏域にある大学の学生を Smart COIL を用いて受け入れる。また、プログラム自体を他の国内の大学が独自で実施する場合についても千葉大学のシステムを提供して協力する。しかし、申請段階からの連携は難しいため、申請は単独で行うという判断に至っている。

④ 交流プログラムの内容 【2ページ以内】

【実績・準備状況】

本交流プログラムにおいて、千葉大学と連携する4つの大学とは、長い連携の歴史を有している。一番長いのはアラバマ大学であり今年で34年となる。ストーニーブルック大学とは22年、ニュースクール大学およびシンシナティ大学とは6年だが、この2校とは近年積極的に学生交流を行っており、毎年双方には10名程度の派遣、受入を実施している。中でも、シンシナティ大学は、学長が国際教養学部の学部開設の記念式典にも来校され、新学部でありながらも、リベラルアーツ教育における連携をスタートしている。これ以外にも、文学、工学、薬学と多様な領域での交流が進んでおり、2016年には北米で2つ目のIEC (Inter Exchange Center) オフィスを設置、千葉大学の卒業生を現地で雇用し運営している。

この4つの大学は、大きく2つに分類できる。1つは、アラバマ大学とシンシナティ大学で、総合型の大学として運営されている。一方で、ニュースクール大学とストーニーブルック大学は、個性的な教育領域が集まった連合型の大学という特徴を持っている。そのため、総合型大学はオンライン教育や e-Learning が盛んであり、連合型の大学はカレッジ間(過去は単独大学)での COIL が盛んであるという異なる発展をしているのが特徴である。中でも、ストーニーブルック大学で実施されている COIL は、ニューヨーク州立大学連合 SUNY の一つであり、ニューヨーク州立大学のプログラムで、米国でもっとも歴史があり、広範な COIL を実施している。

本事業は、このような異なる特徴を持った大学と連携し実施する。各大学との連携は、千葉大学の強みである学部との交流からスタートしている。この4つの大学と千葉大学の学部との連携は図1のようになっており、これまで各々の専門領域を主に交流を進めてきている。この中で、全学的に研究・教育連携を実施している大学は、総合大学でもあるアラバマ大学、シンシナティ大学であり、3学部以上との連携を実施している。図1から分かるように、これらの4つの大学と連携を行なっている専門領域には、日本で唯一千葉大学にのみ存在する学部が多く、それゆえに協定校も米国の中ではユニークな教育・研究領域を有していることが多かったことにより、今回本事業で目指す「ユニークなプログラムを COIL で実施する」という発想に至っている。



図1 4大学と連携の強い千葉大学の学部

【計画内容】

本事業は、5年間で24のプログラムを開発する。これらを、COIL JUSU (Japan U.S. Unique) Programと呼ぶ。ユニーク・プログラムは、学生に新たな学びの興味を喚起させ、自らが多様な学びを経験するとともに、学生が学生に教えあうことで、国際共同学習における更なる学習効果を目指す。そして、履修学生には、自分たちのキャリア・パスを想像し、多様なプログラムから、新たな知識の連結を試みることで、未来の雇用を創造してもらう。このような、創造性(新たな知性)へのチャレンジは更なる発展が期待できる。本事業では、このユニーク・プログラムに関連したソシアル・ラーニング、COIL +VIP(+ Volunteer, Internship and Professional Study)を実施する。更には、事前学習+事後学習で COIL での効果を最大限に引き出していく。また、本事業では、千葉大学が設置を予定している 国際教養学大学院と連携し、平成 32 年度からは、プログラムを大学院へ拡張させ実施する。

■ Smart COIL で教育を変える

千葉大学は、2016年に国際未来教育基幹を設置、未来型教育の開発を推進している。この基幹に、本年度新たにイノベーション教育センターを設置し、どこでも学習できる スマート・ラーニングを推進している。スマート・ラーニングでは、オンラインで授業に参加できるほか、オンライン・ティーチングの実施、メディア・コンテンツを利用した e-Learning でどこでも学べることを実現する(図2)。なかでも、オンラインにより遠隔地からの授業参加を可能にし、2017年9月に設置したバンコク・キャンパス(マヒドン大学内)で、日本での授業に参加し、留学中でも必修科目を履修できるシステムを現在構築している。この スマート・ラーニングのシステムを COIL に適用し、国内の4キャンパスとバンコク・キャンパス全てから参加できる Smart COILを実現する。

■ 全学導入の国際日本学と連携し COIL を全学に普及

2014年に導入した国際日本学関連の科目1単位を全学生に必修化している。これはグローバル人材育成にフォーカスしたプログラムであり、外国での学習や国際体験の必要性について教示しているが、この中で Smart COIL について教える。また、新たに選択科目として「COIL 学習の基礎」を新規設置し全学へ展開する。これにより、全学の学生にスマート・ラーニング、COIL を理解させ、国内・海外キャンパスおよび留学先でのシームレスな学習が実行可能であることを認識してもらい、教育システムの更なるグローバル化を推進する。これにより、COIL 学習の

基礎(1単位)+事前学習(1単位)+COIL JUSU(1単位)+事後学習(1単位)+COIL VIP(2単位)=(6単位)の COIL SICR(COIL Six Credits)プログラムをセットする。

COIL JUSU「都市緑化 環境問題」



図2 スマート・ラーニングと Smart COIL

■未来の国際教養学大学院セルフ・デザイン・メジャー専攻で未来の雇用を創造する

本事業では、学部と大学院の両方で COIL JUSU を実施する。そして、これらのプログラムで学んだ学生が、独自にニュー・メジャーを作ることを目標としている。このニュー・メジャーは、未来の仕事を創造するもので、それにより未来の雇用を創造する。裏を返すと、新しい雇用に必要な新しい知識を身につけるプログラムを学生自らが創造するということになる。このようなニュー・メジャーの学びを実現する、セルフ・デザイン・メジャー専攻をもつ国際教養学大学院を平成 32 年度に設置する。そのために、平成 30 年度より、進学対象となる国際教養学部の3年生を対象に、学部におけるセルフ・デザイン・メジャーの学生の ラーニング・モデル を蓄積する。国際教養学部では、文理混合型教育のもとに、3つのメジャーである「グローバルスタディーズ」、「現代日本学」、「総合科学」が存在しているが、学生はその3つを自由に組み合わせて学ぶことができるようになっており、セルフ・デザイン・メジャーに近い学びが可能である。このような新しい学びのスタイルを大学院に発展させ、未来の雇用(仕事)を創造することができる学生を、文理混合のセルフ・デザイン・メジャー専攻で育成する。未来の雇用とは、例えば、AR トラベル・ガイド、アグリ・デザイナー、メモリー・キュレーター、など色々と考えられるが、現在の日本の大学では対応できる専攻がない。このような、新たなメジャーを持つ大学院を設置し、日本人だけではなく外国の学生も受け入れて育成していく。

本事業では、COIL +VIPプログラムを実施する。これは、COIL JUSUにおいてトップの5%の学生を対象に実施する派遣・受入を伴う、インターンシップなどである。国際教養学大学院では、これらを「ソーシャル・ラーニング科目群」として必修化する。また、セルフ・デザイン・メジャー専攻で展開するニュー・メジャーのラーニング・モデルは、他の専攻でも十分可能であり、将来的にはマイナー・プログラムとして普及させ、全学展開し、このような未来の人材を、国際教養学大学院以外でも育成していく。

■COIL JUSU, COIL+VIP, COIL JUSU, COIL+VIP, COIL JUSUと2種類の教育プログラムをサンドイッチで開発

プログラムは、平成 30 年度の米国の後期セメスター(平成 31 年 1 月より実施)に各大学と1プログラムを実施する。同時に、千葉大学からも各大学に1プログラム、合計4つのプログラムを提供し、初年度に8つのプログラムを実施する。そして、初年度に参加した学生の学習成果内容を受け、平成 31 年 8 月までにチューニングし、平成 31 年度は、同様の 8 プログラムで実施する。このように、1つのプログラムの開発、実施、効果、評価を2年間で実施することを繰り返していく。平成 32 年度には、大学院に向けたプログラムを 8 プログラム追加、平成 34 年度には、学部 4 プログラム、大学院 4 プログラムを追加し、合計 24 プログラムを完成年度までに構築する。

各プログラムは 25 名までの少人数プログラムを徹底し、合計 360 名(平均 15 名)の学生を対象とする。

平成 31 年度には、初年度に開発した 8 プログラムに関連する COIL +VIP を実施する。平成 31 年度は 20 名の派遣、20 名の受入を実施する。最終的には、各プログラムの優秀な学生を派遣 25 名、受入 25 名程度選抜し、COIL +VIP プログラムに参加させる。この人数は参加学生(360 名)の 5%程度を想定している。

このように COIL JUSU に COIL +VIP をサンドイッチしてプログラム全体を構築し、ユニークかつ実践的プログラムを実現する。

■学内外への普及

本プログラムでは、米国でしか学べない、日本でしか学べない、をモットーに、ユニークなプログラムを提供する。そして、それらから新たなラーニング・モデルを構築することで、ニュー・メジャーを構築する。このニュー・メジャーは、未来の雇用に必要なものが創造される可能性が高いため、これらの情報を、国内の大学を中心に広く普及させる。普及にあたっては、全国の教育関係共同利用拠点であるアカデミック・リンク・センターが教職員向けに実施しているALPSプログラムで広報する。ALPSプログラムでは、これまでの教学システムについての学習プログラムを数多く手がけており、その実績と構築されている国内広報ネットワークを利用して実施する。

⑤ 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 【2ページ以内】

【実績・準備状況】

千葉大学は平成 29 年 9 月 19 日に、バンコクに新たなキャンパスを設置した。これは、マヒドン大学との連携により設置したものであり、今後年間 600 人の学生を派遣、現地で 400 人の外国人学生の受入を行い、現地での学びを推進する。このバンコク・キャンパスでは、

- (1) マヒドン大学と共同で実施するアジアにおける課題を現地で解決するフィールド型プログラム
- (2) アジアの学生を対象にした日本人学生との共学によるオフショア・プログラム

(3) スマート・ラーニング・システムでバンコク・キャンパスでも日本の授業を受講可能

の3つを実施予定であり、本年度より本格稼働する。特に(3)のプログラムは、千葉大学の新たな試みであり、国際未来教育基幹イノベーション教育センターが推進する。スマート・ラーニングでは、大学院までを視野に置いた高度な学習を世界中のどこでも学べることを目指し、バンコク・キャンパスをモデルにして展開している。

一方で、平成 25 年より 2-4 週間の **サマー・プログラム(ショート・プログラム)**を実施している。これは、協定校を中心とした留学生の受入拡大と、大学院進学を予定している学生に千葉大学を経験してもらい千葉大学で学んでもらうきっかけ作りである。サマー・プログラム(ショート・プログラム)は、現在20あり、「都市緑化計画」「災害看護」「工業デザイン」「リモート・センシング」「日本型東洋医学」「クール・ジャパン」など、いずれも **千葉大学の特徴的なジャパン・プログラム** に受講者が多く集まっており、年間 300 名以上が受講している。

本事業では、このような **「海外キャンパスでのスマート・ラーニングの推進」、「千葉大学の特徴的なジャパン・プログラムの実施」**の2つの実績をもとに、米国の各大学が 3 プログラムずつ合計 12 プログラムを、日本側は5年間に千葉大学全体で 12 プログラム開発することで、米国と日本のユニーク・プログラムを共同で提供しあい、COIL JUSU (Japan U.S. Unique) とし構築する。プログラムの内容については、すでに4大学とこれまでの実績をもとに継続するものから開始することで合意を得ている。

なお、連携する4つの大学はいずれも、IAU の WHED を受けている大学であり、極めてレベルの高い大学である。そして、アラバマ大学とシンシナティ大学が総合型大学、ニュースクール大学とストーニーブルック大学は連合型大学と、大学の生い立ちと現在の運営形態の異なる大学を戦略的に連携校とし、プログラムを実施するものであり、準備は十分である。

【計画内容】

■24 の COIL JUSU プログラム

開講予定の授業科目は、下記の 24 科目を予定している。表 1 は、米国の大学毎に COIL JUSU とする科目であり、表 2 は千葉大学の COIL JUSU 構築予定の科目である。これらのプログラムは、**1 単位 15 学習時間を基本として構築** する。内容によっては、米国の大学と相談の上で2単位科目にするが、その場合は 30 時間の学習時間となる。また、本プログラムと共同するプログラムとして、**「COIL 学習の基礎」をビデオ教材により学習** させることも実施し、参加する日本人学生にはこのオンライン教材(平成 30 年度は対面授業を予定し、ビデオ・メディアを製作する)を受講させる。

各科目は、全てアクティブ・ラーニング方式で行う。授業の構成としては、その **1/3 を発表やディスカッションを中心としたオンラインの共同学習に、1/3 を双方の大学での独自学習に、1/3 をチュートリアルおよびビデオ教材学習** にあて実施する。また、本プログラムは、そのレベルをナンバリングで管理する。両方の表にナンバとあるのがナンバリングである。学部学生には 300-400 番台を、大学院学生には 500 番台を受講してもらう。平成 30 年度は、300-400 番台で開発する、平成 32, 34 年度は、500 番台を中心に開発する。このように、1年おきに開発を行い、難易度を上げ COIL JUSU を充実させる。また、これらの COIL 科目に関連した、インターンシップ、ボランティアのソーシャル・ラーニングを **COIL +VIP として実施** する。これらについては、**既存のグローバルインターンシップ、グローバルボランティア、ソーシャル・ラーニング I という授業科目をそのまま適用** する。

表1 米国の大学が提供を予定する授業

大学	授業科目	概要	ナンバ	単位	学期	対応専門
アラバマ	(1) Social Education	社会学習とグループワーク 教育プログラム開発	300	1	6T	教・国際
	(2) Civil Study	社会参加型研究 社会課題をテーマとした研究	500 院	1	5T	国際教養
	(3) Global IPE	医・薬・看護連携実践型教育プログラム	300	1	1T	医・薬・看護
シンシナティ	(1) Cosmetic Science	化粧品学 化粧品科学 化粧品利用学	400	1	3T	理・工・薬
	(2) Business	ビジネス・モデル学習 ケース・スタディ	400	1	6T	法政経
	(3) Landscape	建築・園芸・デザイン複合型ランドスケープ	500 院	1	1T	園芸・工
ニュー スクール	(1) Business Innovation	ニュー・ビジネス・モデルによるイノベーション立案	300	1	4T	工・国際
	(2) Design Thinking	デザイン思考モデルの適用	400	1	4T	工・国際
	(3) Service Design	社会サービスのランド・デザイン開発	500 院	1	6T	工・国際
ストーニー ブルック	(1) Art & Entertainment	米国の先端エンターテインメントと芸術	300	1	4T	文・国際
	(2) American Literature	米国の文学 日本との違い	400	1	4T	文・国際
	(3) Wellness	ウェルネス 健康と予防 快適な生活	500 院	1	6T	医・国際

表2 千葉大学が提供を予定する授業

領域	担当学部	授業科目	概要	ナンバ	単位	学期
生命科学	看護 看護 医・薬・看 医・工	(1) 災害看護 緊急時看護	過去の災害の経験による看護対策	300	1	4T
		(2) 高齢者看護 高齢者医療	人生100年における高齢者看護	500 院	1	5T
		(3) グローバル IPE	医学+薬学+看護学の共同学習モデル	500 院	1	1T
		(4) 医工学 医療システム	画像センシングの医療応用	500 院	1	3T
自然科学	園芸 工・園芸 園芸・国際 理・工	(1) 完全人工植物工場	人工光型植物の技術革新	300	1	3T
		(2) 造園学	自然を利用した造園学	500 院	1	6T
		(3) 都市緑化 環境問題	過密都市の屋上緑化による空間利用	500 院	1	1T
		(4) イメージ・センシング	アジアの画像診断による環境課題の解決	500 院	1	4T
社会科学	国際教養 国際教養 園芸・国際 工・国際	(1) 能・狂言 日本古典芸能	日本の伝統芸能のこれまでとこれから	300	1	4T
		(2) 禅と日本文化	日本の伝統文化と禅	400	1	4T
		(3) 農業の6次産業化	生産加工販売の統合型農業の未来技術	500 院	1	6T
		(4) コミュニティ再生ケア	日本の縮図である千葉に学ぶ日本の未来	500 院	1	3T

■教育の質を保証するための6つの特徴的な戦略

本事業は、国際教養学部が中心となり実施する。事業としての企画・立案・管理・評価は、イノベーション教育センターが行い、授業は国際教養学部が中心となり実施する。ユニーク・プログラムでは、専門領域の教員が必要となるが、COIL JUSU では、国際教養学部の教員と他9学部の教員と一緒に実施する。学生は全学の学生が受講できる学部共通科目および大学院共通科目として実施する。この国際教養学部は、50%以上の教員が外国人および外国での研究・教育の経験のある教員である。このように、グローバルな教員を戦略的に配置している国際教養学部が学内をリードし、以下の6つの特徴のもとに展開する。

(1)教育課程とラーニング・アグリーメントによる相互保証

米国の大学とは、すべての授業科目においてシラバスによる相互認定と、単位の互換について、**教育課程に関する覚書を作成して実施**する。この教育課程は、これまでに30近いダブル・ディグリー設置時にも締結してきている。千葉大学の学生には、この教育課程に基づき、千葉大学で新たに科目を新設し、単位を付与する。米国の大学については、千葉大学の単位をそのまま付与するか、教育課程に基づき先方の大学の単位として互換するかを決めながら進めていく。

(2)マイナー「国際日本学」の拡大

これらの新規の科目は、全て千葉大学のマイナー学位である「国際日本学」の科目として登録する。国際日本学の科目は、教養科目と専門科目に分かれており、300-400 は学部の専門科目、500-600 は大学院の専門科目として履修でき、卒業や修了に必要な単位として認定するとともに、「国際日本学」の副専攻の修了証書や履修証明書も授与する。**COIL 参加学生へのマイナーの付与を推進**する。

(3)6ターム制の利用でスムーズな派遣・受入の実施

千葉大学では、2016年より6ターム制度を導入、今年で3年目を迎える。この1年を2ヶ月毎に分けた学事暦で、学生の短期留学が急速に広がっている。このターム制を利用して、COIL を実施する。**米国の大学の学事暦に合わせ、3-5タームで授業を実施する。後半は5-1タームで実施**する。この後半に実施するプログラムのみ卒業する4年時学生には推奨しない。また、事前学習や事後学習、COIL +VIP は、3ターム、6タームの他の通常授業のない時期に戦略的に入れ、学生の学期中の負担を軽減し COIL +VIP への集中を高める。

(4)セルフ・デザイン・メジャーへの発展

本事業では、広範な専門で授業を実施する。その中で自由に専門を組み合わせるのがセルフ・デザイン・メジャー専攻である。この **セルフ・デザイン・メジャー専攻の学修課程そのものが、新たな学びであり、未来の雇用を創造する**と考え、学生それぞれの学修課程をラーニング・モデルとして蓄積し、ニュー・メジャーを設置する。将来的には、この方法を他の研究科にも発展させ、他の研究科でもセルフ・デザイン・メジャー専攻を導入する。

(5)大学院マイナー・プログラムでの研究ユニット招聘型授業の実施

大学院での共通教育プログラムは、ワールド・スクールとして実施され、現在3つのマイナーを獲得できるようになっている。これらには、海外の協定校からプログラムと直結している **研究領域の教員を研究ユニットごとに招聘し教員・学生の研究・教育交流を実施**している。具体的には、これまで、韓国、中国、シンガポールのアジア圏はもとより、UK、ドイツ、イタリア、フィンランド、米国、メキシコ、パナマ、ロシアなどの多くの国と交流を実施しており本プログラムでもこのスキームを利用する。

(6)ダブル・ディグリーへの発展

米国の大学とのダブル・ディグリーは、現在、融合理工学府創成工学専攻 **デザインコースがシンシナティ大学と検討**している。教育内容については、問題ないが、設置人数等の課題が存在している。今後、長期的な展望に立ち、設置を実現させる予定でいる。デザインコースはすでに6つのダブル・ディグリー・プログラムを運営しており、すべて、ガイドラインに準拠している。このような **豊富な経験のもと更なるプログラムを設置**する。

以上のように、本事業では、上記の6つの特徴的な戦略のもとに質の高い教育を実施する。

達成目標 【①～④合わせて3ページ以内】
<p>① 将来の関係を見据えた、両国間の連携強化に資する目標について</p>
<p>(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)</p> <p>事業計画全体における達成目標は、数値目標3つ、定性的目標3つの計6つを計画している。以下にそれぞれの達成目標について述べる。</p> <p>(目標1) <u>COIL JUSUを米国大学12プログラム、千葉大学12プログラムの24プログラム構築</u> (目標2) <u>プログラム参加学生数、年間目標540人、COIL +VIP 参加学生年間目標28人</u> (目標3) <u>事前学習+COIL JUSU+事後学習+COIL +VIP で6単位取得 COIL SICR プログラム設置 年間25人</u> (目標4) <u>ユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの実施</u> (目標5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発 ニュー・メジャーのモデル開発</u> (目標6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻の国際教養学大学院の設置</u></p> <p>以上のように、開発すべきプログラム数とその内容、および参加学生に関する達成目標をもとに、「<u>未来の雇用を創造し、自らを雇用する人材</u>」を育成する。</p>
<p>(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)</p> <p>上記の6つの目標を達成するために、平成31年度までに、以下の中間目標を設定する。</p> <p>(目標1) <u>ユニーク・プログラムを米国大学4プログラム、千葉大学4プログラムの8プログラム構築</u> (目標2) <u>プログラム参加学生数、年間目標180人、COIL +VIP 参加学生年間目標20人</u> (目標3) <u>事前学習+COIL JUSU+事後学習+COIL +VIP で6単位取得 COIL SICR プログラム設置予定</u> (目標4) <u>ユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの施行</u> (目標5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発 ニュー・メジャーのモデルのデータ蓄積</u> (目標6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻の国際教養学大学院の設置予定(平成32年度)</u></p> <p>中間評価までには、定量的な目標はその半分を目標とする。ただし、COIL SICR は、設置を目標とし、平成31年度後期から平成32年度前期の期間(米国のアカデミックカレンダーの1年)での取得を目標とする。また、ラーニング・モデルやニュー・メジャーのプランおよび、国際教養学大学院は、平成32年度より開始予定であり、中間評価時には、入学生数等の状況について報告できる。</p>
<p>② 養成しようとするグローバル人材像について</p>
<p>(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)</p> <p>育成する人材は、ユニーク・プログラムを受講することで、「<u>未来の雇用を創造し、自らを雇用する人材</u>」である。仕事を創造するのではなく、雇用を創造することは、仕事はそのままであっても、内容が変わることを意味している。現在は人間が行なっている業務がロボットにより自動化された時に、業務の内容が変わる。あるいは、仕事は同じでも、全くそのプロセスや方法が変わる。さらには、「<u>想像を超えるような2つの異なるものが融合し、新たな仕事生まれる</u>」こともある。例えば、AR トラベル・ガイド(人工現実による旅行のガイド)、アグリ・デザイナー(農業をデザインする)、メモリー・キュレーター(人の記憶を視覚的に管理する)などは一例である。</p> <p>このような社会変化に対応するために、「<u>多様な領域の教養を身につけ</u>」るとともに、それらを「<u>統合する力により創造を促す</u>」必要がある。このようなことができる人材を育成するために、セルフ・デザイン・メジャー専攻を設置する。このセルフ・デザイン・メジャー専攻で展開するニュー・メジャーのラーニング・モデルは、他の研究科でも十分可能であり、将来的にはマイナー・プログラムとして普及させ、全学展開し「<u>未来の人材</u>」を全学で育成する。</p>
<p>(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)</p> <p>中間評価までに、「<u>国際教養学大学院を設置し、セルフ・デザイン・メジャー専攻をスタート</u>」させる。そのための、ニュー・メジャーを学生とともに考える。このフレーム・ワークを構築するにあたり、これまでに SGU で実施している国際日本学を、マイナー・プログラムで取得した学生とのディスカッションや、園芸・看護・工で実施しているグローバル・プログラムを参考に作り、人材育成に必要な仕組みを準備する。</p> <p>セルフ・デザイン・メジャー専攻の学習内容は、例えば SDGs のように社会的な課題を解決することを目標として、「<u>(A)COIL JUSU によるユニーク・プログラム、(B)COIL +VIP のようなソーシャル・ラーニング、(C)ニュー・メジャーとしてのプロジェクト研究</u>」、の3つで構成する予定である。このようなプログラムで、(A) = 多様な領域の教養の涵養、(B) = 新たな社会実践型学習、(C) = 未来の雇用の創造、を目標とし人材を育成する。平成31年度までには、学生への提案としてのサンプル的なニュー・メジャーを、国際教養学部のメジャーである「グローバルスタディーズ」、「現代日本学」、「総合科学」で構築し提案する。</p>

③-1 学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

(i) 本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

外国語力基準		達成目標	
		中間評価まで (事業開始～平成31年度まで)	事業計画全体 (事業開始～平成34年度まで)
	【参考】本事業計画において海外に留学する日本人学生数	35人(延べ数)	110人(延べ数)
1	JUSUプログラム参加の日本人学生 学部生 TOEFL iBT 80 (TOEIC 730) 程度以上 大学院生 TOEFL iBT 86 (TOEIC 750) 程度以上	240人(延べ数)	1,080人(延べ数)
2	JUSUプログラム参加の日本人学生のうちVIPに 参加のための海外派遣学生 学部生 TOEFL iBT 85 程度以上 大学院生 TOEFL iBT 92 程度以上	10人(延べ数)	65人(延べ数)
3	国際教養学大学院を設置 セルフ・デザイン・メジャー専攻 TOEFL iBT 92 程度以上	0人(延べ数)	45人(延べ数)

(ii) 外国語力基準を定めた考え方

千葉大学では、現在入学後に TOEFL によるプレイスメントテストを入学生全員に実施している。この結果は、その後の学力別クラス編成に利用している。現在では5段階で、CEFRの定めるB1(TOEFL iBT 71以下)、B2(72-79)、B2+(80-94)、C1(95-)、C2 の5段階としている。千葉大学ではスーパーグローバル大学創成支援事業において、グローバル人材としての外国語力基準をCEFRのB2+以上、TOEFL iBT 80(TOEIC730)点以上と定めている。その目標数は、平成31年度までには、学部では3,600名30.8%、大学院では1,600名37.2%を目標、平成35年度までには、学部では5,600名46.7%、大学院では2,000名44.4%を目標としている。本事業でも、このSGUで目標としている能力を有していることを条件とするため、このCEFRのB2+以上、TOEFL iBT 80(TOEIC730)をプログラム参加の要件とする。

(iii) 事業計画全体の目標達成に向けたプロセス(事業開始～平成34年度まで)

本事業では、COILにおいて英語によるディスカッションが前提となる。そのため、CEFRの定めるB2+以上のレベルの学生を対象にする。千葉大学では、外国語の授業(必修)、イングリッシュ・コミュニケーション(ブリティッシュ・カウンシルとの連携による会話やディスカッション主体の授業)、イングリッシュ・ハウス(常勤教員によるプレゼンテーションやディスカッションのスキルアップ・トレーニング)の3つの英語学習を備えている。COILに参加する学生には、その英語のレベルに合わせて、イングリッシュ・コミュニケーションの履修や、イングリッシュ・ハウスでのトレーニングを推奨し、COILのディスカッションに備える。

また、平成31年度より英語のカリキュラムを全面的に改訂する予定であり、卒業に必要な単位数を増加させ、専門科目を英語により学習するアカデミック・プレゼンテーションを主に実施する。本事業は英語のみであるため、プログラム専用の授業ではなく、学内オープン授業として、ディスカッションとプレゼンテーションに特化したプログラムを構築し、イングリッシュ・ハウスで実施する。

(iv) 中間評価までの目標達成に向けたプロセス(事業開始～平成31年度まで)

本事業では、学内オープン授業として、ディスカッションとプレゼンテーション用の授業を、イングリッシュ・ハウスで実施する。授業はCOILの概要と以下の3つの観点より構築する。

- (1) 英語によるプレゼンテーションのプロセスの理論と実践
- (2) 英語によるディスカッションのポイントと討議内容のまとめ方の構築
- (3) 英語によるプレゼンテーションのための資料(パワーポイント等)の作成方法

これらのプログラムを含めたCOIL用の事前学習プログラムを準備し、日本人学生100人のうち、50人程度を対象に受講させる。また、これらの授業の素材は、再利用が可能なビデオ教材とするが、履修の確認は、すべて、プレゼンテーションやディスカッションを行い、ネイティブの教員からの指導を受ける。

③-2 学生に修得させる具体的能力のうち、「③-1」以外について
(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)
<p>セルフ・デザイン・メジャーの学生は、その人材育成の目標にもあるように「未来の雇用を創造する」ことを求めるイノベーション人材である。そのために身につけるべく能力として、3つの能力を求める。この3つは大学のスローガンである「つねにより高きものめざして」のもとに、SGU で定めた「俯瞰力」「発見力」「実践力」である。</p>
(1) (俯瞰力) ワイド・スタンスに立った高度な俯瞰力 複数の専門能力の深い知識
COIL JUSU の24プログラムにおける学習達成度
(2) (発見力) ニュー・メジャーを創造する能力とそれを実現するための行動力
学生と共に3つのニュー・メジャーを構築
(3) (実践力) 専門を横断したプロジェクトにおける実践的なリーダーシップ能力
10つのPBLと8つのCOIL+VIPプログラム 合計18プログラムにおける学習達成度
<p>学内において他の研究科に属している学生でも、<u>セルフ・デザイン・メジャー専攻のマイナー取得を可能とする</u>。この場合は軸足を従来の専門におき、他の授業を積極的に履修し、新たなラーニング・モデルを作る。現在実施されているワールド・スクールで修士課程では8単位以上の単位を取得した場合はマイナーを付与するため、これと同様に <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻のマイナーも8単位以上で付与する</u>。</p>
(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)
<p>平成32年4月に国際教養学大学院を開設し、セルフ・デザイン・メジャー専攻をスタートする。そのための準備を全て平成31年度までに終了する。それまでに <u>以下の3つを達成</u> することで学生の能力を測る。</p>
(1) (俯瞰力) <u>COIL JUSU の8プログラムを大学院用に開発</u> し、参加学生の学習到達度と満足度を評価
(2) (発見力) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルを3つ構築</u> し、学生とともにニュー・メジャーを構築する
(3) (実践力) <u>4つのPBLと4つのCOIL+VIPのプログラムを開発</u> し、参加学生の学習到達度を評価
<p>また、これら以外にも、本プログラムをマイナーのプログラムとして参加する学生についても学習到達度を評価していく。このように、プログラムにおける学生に期待する3つの具体的能力を、数値目標とともに測定して、中間評価・最終評価の両方で継続的に評価していく。</p>
④ 質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について
(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)
<p>本プログラムに参加する大学とは、<u>全て大学間交流協定と学生交流協定のもとに実施</u> する。プログラムの連携大学である4大学とは、すでに6年から22年という過去の交流実績が存在している。このように、全てが大学間交流協定および学生交流協定の元に進めるため、大学同士がプログラムの質の保証を行うことになる。</p>
(1) <u>学修課程</u> による授業の <u>単位互換に関する相互確認</u> の実施 教養・専門および学部・大学院での実施
(2) <u>シラバス</u> による <u>学修内容の相互確認</u> およびナンバリングによる授業レベルの相互確認
(3) 派遣・受入の学生ごとの <u>ラーニング・アグリーメント</u> の作成 COIL+VIPプログラムの <u>相互保証</u>
<p>の3つをもとに実施する。また、本プログラムでは、プログラムの展開により、他の米国大学をメンバーとしていれ、拡大展開していく。現在では、アリゾナ大学(園芸学部)、CCS(工学部)、UCリバーサイド(工学部)、ダートマス大学(国際教養学部)などと交渉を進めている。これらのうち1-2校との展開を予定している。以上のように、本プログラムは、<u>完全な単位互換のもとに十分な質の保証を伴ったプログラムとして実施</u> する。</p>
(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)
<p>中間評価までには、この3つ、学修課程、シラバス、ラーニング・アグリーメントの全てを、COIL JUSU を行う4大学、8プログラム(各校2プログラム予定)で実行する。</p>
<p>(1) 教育課程による授業の単位互換に関する相互確認の実施については、これまでにダブル・ディグリーで結んできたものを参考に、大学ごとに、<u>1対象専攻、2プログラム概要、3目的、4学生の選抜、5履修要件、6単位互換、7科目一覧(年度ごとに追加予定)などの7項目を決定し実施</u> する。</p>
<p>(2) シラバスは、千葉大学が全ての授業で作成、公開している、<u>単位・開講時期の基本情報21項目、および1概要、2目的、3授業計画、4授業外授業などの内容についての11項目、の合計32項目について作成し、公開</u> する。これらを全て学生ポータルに日本語および英語の2言語併用で実施する。</p>
<p>(3) ラーニング・アグリーメントは、大きく2つの情報で構成する。1つは、<u>学生が履修している授業一覧と COIL の履修科目との両方がわかる履修状況</u>。もう一つは、<u>COIL の履修科目とその学修到達目標</u> である。</p>
<p>以上のように、プログラム全体の学習を管理することで、極めて質の高いプログラムを、双方の大学の保障のもとに実施する。</p>

⑤ 本事業計画におけるCOIL型教育手法を活用した授業科目数及び受講者数の推移 【1ページ以内】

(i) COIL型教育手法を活用した授業科目数及び受講者数の達成目標

	中間評価までの達成目標 (平成31年度まで)	事後評価までの達成目標 (平成34年度まで)
本事業における COIL型教育手法を活用した授業科目数	8科目	24科目
大学全体の COIL型教育手法を活用した授業科目数	17科目	42科目
本事業における COIL型教育の受講者数(日本人学生)	240人(延べ数)	1,080人(延べ数)
本事業における COIL型教育の受講者数(外国人学生)	120人(延べ数)	540人(延べ数)

(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス(事業計画全体、中間評価までの双方について)

■COIL JUSU, COIL +VIP, COIL JUSU, COIL +VIP, COIL JUSUと教育プログラムをサンドイッチで開発

本事業では、採択年度(平成30年度)に米国の大学から4、千葉大学から4の合計8科目の学部向けCOIL JUSUを実施する。平成31年度は、このプログラムと関連するCOIL +VIPを4種類開講する。COIL +VIPは新規の授業となるが、科目としてはすでに開講しているグローバルインターンシップやグローバルボランティア、ソーシャル・ラーニングIとして履修する。COIL JUSUは、平成32年度には、大学院のCOIL JUSUを8科目、平成34年度には、学部4科目、大学院4科目の計8科目を実施する。また、COIL +VIPは、平成33年度に大学院用の4種類を実施する。このように、交互に開発し、COIL JUSUを24科目、COIL +VIP 8種類を開発する。開発する授業科目はすでに「様式1⑤質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成」に示している通りである。

本事業では、このCOILの利用を積極的に高めるために、COILに関連する授業も準備する。これは、先のCOIL JUSUの24科目には含まれていない。COILに関連する科目は、現時点では、以下の表3のように4つ、**事前事後学習科目、COIL +VIP科目、学部COIL 予定科目、大学院COIL 予定科目**に分類できる。中でも、大学院の科目は、平成32年度の国際教養学大学院セルフ・デザイン・メジャー専攻の設置の前までに、現在COIL JUSUで開講を予定している12科目の2倍以上の科目を準備する。

また、これまでに他の世界展開力で構築してきた科目についてもCOILへの対応を予定している。これには、すでに期間終了後も自立して運営している平成23年度「大陸間デザイン教育プログラム」および平成24年度「ツイン型派遣プログラム」などで構築したグローバル関連プログラムをあてていく。また、この米国の大学とのCOILを参考に、現在大学院で実施している共通授業をCOILにリニューアルしていく。

表3 COILに関連する授業科目

対象	授業科目	対象	授業科目
事前事後学習科目 4科目	(新規)COIL学習の基礎 留学学グローバル人材育成と留学 留学生支援入門1・2 ソーシャル・ラーニング	大学院 COIL 予定科目 14科目	グローバル・ビジネス・プランニング・リーダー グローバル・テクノロジー・デベロップメント・リーダー グローバル・オペレーション・リーダー グローバル・セールス・リーダー デザイン・シンキング アグロインダストリー 垂直農業 インクルーシブ・アグリ・ビジネス フードシステムのサービス・インフォメーション エディブルランドスケープ プラント・シアター アグリ・ビッグデータ ランドスケープとフードシステムのサービス・デザイン 農業6+4次産業化
COIL +VIP 科目 3科目	ソーシャル・ラーニングI グローバルインターンシップ グローバルボランティア		
学部 COIL 予定科目 4科目	グローバル・ビジネス・プランニング グローバル・テクノロジー・デベロップメント グローバル・オペレーション グローバル・セールス		



図3 COIL JUSUとCOIL +VIPの年度別の開発

⑥ 本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移 【1ページ以内】								
現状（平成29年5月1日現在）※1			14人					
(i) 日本人学生数の達成目標								
事業計画全体の達成目標（事業開始～平成34年度まで）			110人（延べ数）					
中間評価までの達成目標（事業開始～平成31年度まで）			35人（延べ数）					
[上記の内訳]								
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計		
合計人数	15人	20人	25人	25人	25人	110人		
(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）								
<p>本プログラムでの日本人学生の派遣は、COIL JUSU の最終プレゼンテーションおよび COIL +VIP 参加として派遣する。これらはいずれも <u>COIL JUSU で優秀な成績を納めたトップの学生を予定</u>している。各授業の参加予定人数は、平均15名前後の少人数教育を徹底する。<u>派遣する学生はそのトップ5%程度に収まる極めて優秀な学生が対象となる</u>。この事業で派遣する学生の内訳は以下の通りであり、現時点で想定している、学部と大学院の人数配分は以下の通りである。<u>平成30年度は学部の教養科目を中心に派遣</u>を行う(表4 二重線で囲んだ部分)。これには、<u>未来のセルフ・デザイン・メジャーを専攻する学生を発掘する</u>という目的がある。平成32年度以降は、設置予定の <u>国際教養学大学院や他の研究科の学生で大学院共通教育をCOIL型で実施する学生</u>であり、かつ米国で COIL +VIP で社会活動や実践型プログラムを実施する学生を優先的に派遣する。派遣する企業やボランティア先は、先方大学と交渉中であるが、各大学のユニーク・プログラムに則した企業や団体に派遣することを調整している。このように、COILはオンラインで実施し、<u>獲得した知識をもとに新たな実践的な経験を得るためにCOIL +VIP に派遣</u>し、インターンシップ、ボランティア、実践経験を実施させるという段階的派遣を実現する。</p> <p>なお、本事業においては、学生が COIL を積極的に利用し、集中してもらうために、<u>派遣も受入も1ターム(2ヶ月)を基本</u>とする。そのため、3ヶ月以上の派遣は全体でも10名程度に戦略的に止める。また、<u>日本人学生の派遣と外国人学生の受入を共に同数とする</u>ことで、学生交流協定の要件である交流学生数の均衡を保つ。</p>								
表4 派遣予定の学生の専攻・COIL JUSU と COIL+VIP 履修の違い								
			30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	合計
アラバマ	COIL JUSU	全学部(教養)	3	2	1	1	1	8
		看護学部	2	2	2	1	1	8
	COIL +VIP	*国際教養学大学院			2	2	2	6
		教育学研究科		2	1	1	1	5
シンシナティ	COIL JUSU	全学部(教養)	3	2	1	1	1	8
		工学部	2			1	1	4
	COIL +VIP	*国際教養学大学院			2	2	2	6
		融合理工学府 薬学研究科		2	2	2	2	8
ニュースクール	COIL JUSU	全学部(教養)	2	2	1	1	1	7
		*国際教養学大学院			2	2	2	6
	COIL +VIP	国際教養学部		2	2	2	2	8
		融合理工学府		2	2	2	2	8
ストーニーブルック	COIL JUSU	全学部(教養)	3	2	1	1	1	8
		*国際教養学大学院			2	2	2	6
	COIL +VIP	文学部			2	2	2	6
		融合理工学府		2	2	2	2	8
小計	COIL JUSU		15	10	10	10	10	55
	COIL +VIP		0	10	15	15	15	55
合計			15	20	25	25	25	110

※1 現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における平成29年5月1日現在の人数。

（大学名：千葉大学）（タイプA 主たる交流先の相手国：米国）

⑦ 本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移 【1ページ以内】								
現状（平成29年5月1日現在）※1			830人					
(i) 外国人学生数の達成目標								
事業計画全体の達成目標（事業開始～平成34年度まで）			110人（延べ数）					
中間評価までの達成目標（事業開始～平成31年度まで）			35人（延べ数）					
[上記の内訳]								
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計		
合計人数	15人	20人	25人	25人	25人	110人		
(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）								
受け入れる外国人学生は、「日本でしか学べないユニークな授業」を受講し、かつ本事業の連携校で選抜された優秀な学生である。日本人と同様に一番優先される学生は、日本でインターンシップやボランティア、実践的学習を行う COIL +VIP の学生となる。これらの予定される COIL +VIP の予定を下記の表5の上のグレー部分に記す。COIL JUSU、COIL +VIP ともに米国の4大学からすべて受け入れるが、専門領域によって受入大学を限定することもある。例えば、現時点では看護学部への受け入れはアラバマ大学のみと考えている。								
このように、千葉大学でしか学べない内容に関連した COIL JUSU、COIL +VIP を実施する。 <u>受入の時期は、6-8月の米国大学の夏季休暇の期間を中心に実施</u> する。これは、千葉大学の2-3タームにあたる。したがって、COIL の事前学習・事後学習も実施しているため、インターンシップやボランティアの合間に千葉大学で COIL のプログラムに日本人学生と共同で学習することができる。この COIL に関連した共同学習は、COIL 参加の日本人学生にとっても有益なものであると言える。								
もう一方の受入は、COIL JUSU に参加した学生で、日本および千葉大学のプログラムに興味を持ち、 <u>2ターム(1セメスター)以上の留学を希望する学生</u> である。学部生の受入は、 <u>現在千葉大学が行なっている日本語・日本文化学習の J-PAC (Japan Program at Chiba) のシステムを利用して行う</u> 。受入は、 <u>国際教養学部で一括して行い、受入期間は1ターム(2ヶ月)を基本とする</u> 。ただし学生によっては、J-PAC と COIL +VIP の両方に参加する学生も想定できるため、受入期間は最長1年間までの間で柔軟に受け入れる。一方、大学院については、平成32年度設置予定の <u>国際教養学大学院を中心に、COIL JUSU を提供する看護学研究科(生命化学)、園芸学研究科(園芸学、植物工場、ランドスケープ)、融合理工学府(デザイン、緑化技術)を希望する交換留学の学生を受け入れる</u> 。受入期間は1タームから2タームが中心となる。これらの学生が受講する予定の科目は、表の下の白い部分のような科目である。千葉大学ならではの専門領域を主に受入を推進し、他の専門も同時に履修することで、受入外国人留学生もセルフ・デザイン・メジャーを意識してもらおう。								
表5 受入予定の学生の大学と千葉大学における学習予定および年度別受入学生予定数								
COIL JUSU, COIL +VIP	受入大学	COIL +VIP 予定先 インターンシップ、ボランティア先など	30	31	32	33	34	合計
現代日本学	A C N S	歴史民俗博物館 イオン QVC	2	3	6	6	6	23
看護学	A	千葉大学附属病院 高齢者施設		2	2	2	2	8
園芸学	A C	JA 千葉 植物工場研究会	2	2	2	2	2	10
工学 デザイン	C N S	富士通 セイコー 千葉市 墨田区	2	3	3	3	3	14
COIL JUSU, J-PAC	受入大学	COIL JUSU, J-PAC, 大学院で受講する共通授業科目等(予定)						
現代日本学	A C N S	現代日本文化 科学技術論 緑化技術とエネルギー	3	4	6	6	6	25
生命科学	A C	先進予防医学 医療ビッグデータ 高機能薬用植物	2	2	2	2	2	10
園芸学 植物工場	A C	人工型植物工場 ハイブリット型植物工場	2	2	2	2	2	10
ランドスケープ	A C N S	公共サービス・デザイン 公共ランドスケープ	2	2	2	2	2	10
合計人数			15	20	25	25	25	110
受入大学 A=アラバマ大学、C=シンシナティ大学、N=ニュースクール大学、S=ストーニーブルック大学								

※1 現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における平成29年5月1日現在の人数を記入。

⑧COIL型教育手法を活用した授業科目について

【国内連携大学等数に応じたページ数】

【本事業で計画しているCOIL型教育手法を活用した授業科目数及び受講者数】

1. 代表申請大学【大学名:千葉大学】

[平成29年度通年] COIL型教育手法を 活用した授業科目数	【各年度通年の数値を記入】				
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
	6				
本事業における COIL型教育手法を 活用した授業科目数	8	8	16	16	24
大学全体の COIL型教育手法を 活用した授業科目数(A)	14	17	28	31	42
全授業科目数(B)	6800	6800	6800	6800	6800
割合(A/B)	0.2%	0.3%	0.4%	0.5%	0.6%
本事業における COIL型教育の受講者数 (日本人学生)	120	120	240	240	360
本事業における COIL型教育の受講者数 (外国人学生)	60	60	120	120	180

2. 国内連携大学【大学等名: 】

[平成29年度通年] COIL型教育手法を 活用した授業科目数	【各年度通年の数値を記入】				
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
本事業における COIL型教育手法を 活用した授業科目数					
大学全体の COIL型教育手法を 活用した授業科目数(A)					
全授業科目数(B)					
割合(A/B)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (日本人学生)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (外国人学生)					

3. 国内連携大学【大学等名: 】

[平成29年度通年] COIL型教育手法を 活用した授業科目数	【各年度通年の数値を記入】				
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
本事業における COIL型教育手法を 活用した授業科目数					
大学全体の COIL型教育手法を 活用した授業科目数(A)					
全授業科目数(B)					
割合(A/B)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (日本人学生)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (外国人学生)					

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

⑨交流する学生数について(平成30年度は事業開始以降の人数)

(単位:人)

(i) 本事業で計画している交流学生数

	平成30年度		平成31年度		平成32年度		平成33年度		平成34年度		合計		
	派遣	受入	派遣	受入									
各年度の派遣及び受入合計人数(交流期間、単位取得の有無等の内訳は、(iii)表参照)	15	15	20	20	25	25	25	25	25	25	110	110	
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	15	15	20	20	25	25	25	25	25	25	110	110
	無	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

(ii) 国内大学及び交流プログラムごとの交流学生数

交流形態	① 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流
	② 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流
	③ 上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流
	④ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流

1. 【代表申請大学】

大学名 千葉大学			平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
交流プログラム名(相手大学名)	交流方向	交流形態						
1 COIL JUSU アラバマ大学 シンシナティ大学 ニュースクール大学 ストーニーブルック大学のいずれか	派遣	①C	15	10	10	10	10	55
	受入	①C	15	10	12	12	12	61
2 COIL +VIP アラバマ大学 シンシナティ大学 ニュースクール大学 ストーニーブルック大学のいずれか	派遣	①C	0	10	12	12	12	46
	派遣	②C	0	0	3	3	3	9
	受入	①C	0	10	10	10	10	40
	受入	②C	0	0	3	3	3	9

2. 【国内連携大学等】

大学等名			平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
交流プログラム名(相手大学名)	交流方向	交流形態						
1	派遣							0
	受入							0
2	派遣							0
	受入							0

3. 【国内連携大学等】

大学等名			平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
交流プログラム名(相手大学名)	交流方向	交流形態						
1	派遣							0
	受入							0
2	派遣							0
	受入							0

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

(iii) 本事業で計画している交流学生数(派遣・受入別 各内訳の集計)

【日本人学生の派遣】			平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
年度別合計人数			15	20	25	25	25	110
【交流形態別 内訳】								
単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流			15	20	22	22	22	101
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		15	20	22	22	22	101
	無		0	0	0	0	0	0
単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			0	0	3	3	3	9
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		0	0	3	3	3	9
	無		0	0	0	0	0	0
上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流			0	0	0	0	0	0
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		0	0	0	0	0	0
	無		0	0	0	0	0	0
上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流			0	0	0	0	0	0
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		0	0	0	0	0	0
	無		0	0	0	0	0	0

【外国人学生の受入】			平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
年度別合計人数			15	20	25	25	25	110
【交流形態別 内訳】								
単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流			15	20	22	22	22	101
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		15	20	22	22	22	101
	無		0	0	0	0	0	0
単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			0	0	3	3	3	9
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		0	0	3	3	3	9
	無		0	0	0	0	0	0
上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流			0	0	0	0	0	0
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		0	0	0	0	0	0
	無		0	0	0	0	0	0
上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流			0	0	0	0	0	0
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有		0	0	0	0	0	0
	無		0	0	0	0	0	0

(大学名: 千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

⑩海外相手大学との単位互換について

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位:校)

	平成30年度		平成31年度		平成32年度		平成33年度		平成34年度	
	派遣	受入								
単位互換を実施する 海外相手大学数	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名:千葉大学】

相手大学名		平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
		アラバマ大学	認定者数	4	6	7
	認定単位数	1	3	4	4	5
シンシナティ大学	認定者数	5	6	8	8	8
	認定単位数	1	3	4	4	5
ニュースクール大学	認定者数	3	4	5	5	5
	認定単位数	1	3	4	4	5
ストーニーブルック大学	認定者数	3	4	5	5	5
	認定単位数	1	3	4	4	5
年度別認定者数合計		15	20	25	25	25
年度別認定単位数合計		4	12	16	16	20

2. 国内連携大学 【大学等名: 】

相手大学名		平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
			認定者数			
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
	認定者数					
	認定単位数					
年度別認定者数合計		0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計		0	0	0	0	0

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 【①～③合わせて2ページ以内】

① 外国人学生の受入のための環境整備

【実績・準備状況】

本学に在籍する留学生は、学位取得目的の学生と協定校からの短期留学等の学生に区分できる。学位取得目的の学生は、国費留学生や外国政府派遣留学生と私費外国人留学生がいる。短期留学生は、千葉大学の交換留学プログラム(J-PAC: Japan Program at Chiba)による受入が中心で、日本語の学習経験があり、日本社会・日本文化に興味を持つ学部留学生を対象に受入を行っている。国際交流は、現在 56 ヶ国 484 の大学や機関と交流協定を締結しており、それを活かして受入・派遣の両面で活発に学生交流が実施されている。

留学生の学習面・生活面の支援については、全学的には国際教育センターと留学生課を中心として、各部署の留学生担当教職員と密接に連携しながら進められている。留学生課にワンストップサービス機能を備えたインターナショナル・サポート・デスク(ISD)を設置し、留学生はすべての情報を入手しサービスを受けることのできる体制ができています。ISD には専門スタッフを5名配置し、英語・中国語・韓国語・スペイン語での対応が可能となっている。ISD では窓口以外にもメールで留学生の相談に応じ、24 時間体制で留学生に対応している。各部署でも、学務担当に外国語対応職員を配置し、留学生課と連携して適切な対応ができるようにしている。本事業でも、この ISD を利用して受入れ学生に対応する。

【計画内容】

本事業は、国際教養学部が全学をマネジメントしながら実施する。一方で、千葉大学が米国の4大学に提供する授業は、看護学部、園芸学部、工学部、国際教養学部と全学で実施されているものであるため、学生所属部署が分散されている。そして、これまでのプログラムとは以下の3つの点で異なっているため、これらの点に注意して学生を受け入れる。

(1) COIL, JUSUにおけるマネジメント

米国にいる間も千葉大学の授業を受けるということは千葉大学の責任である。COILでの学習成果が上がらない場合に、他のサブテキストや参考資料と照会などの学習支援をオンラインで実施する。このオンライン・サポートは、初めてのケースであるため、可能な限り対応し、これらの事例を蓄積し、未来のオンライン・サポートに利用する。この時点から国際教養学部とプログラムを提供する各部署との連携を構築し、その後の受入に備える。

(2) COIL +VIPの受入先企業・団体との連携

受入予定の学生の多くは、COIL +VIPで企業・自治体などへインターンシップやボランティアに行く。そのため、学内だけではなく、受入先企業・団体との連携との連携が重要である。これらの情報は一元管理することが望ましい。本事業では、可能なかぎり国際教養学部で管理しながら進める。本来であれば留学生課となるが、本プログラム期間中は国際教養学部のSULAに情報を集約し一元管理する。これは、実務内容が教育に近いため、留学生課ではなく部局で実施した方が良いと判断したためである。この時点で学籍が発生するため、学生ポータルに情報を蓄積し、学生とともに学習履歴を作成する。

(3) 再留学時(J-PAC、国際教養学大学院への進学)の導入

再留学時への導入までは、国際教養学部のSULAが行うが、その後の留学目的により2つに分けて受入に対応する。J-PACなどの全学の共通プログラムに留学する場合は留学生課が管理する。設置予定の国際教養学大学院をはじめ、専門領域への修士課程以上の留学は、先の学習履歴とともに、各研究科で管理する。

② 日本人学生の派遣のための環境整備

【実績・準備状況】

平成29年4月より、大学の教育プログラムのグローバル化に合わせた組織改革を行い、国際企画課を学務部に所属させ、大学における教育の国際化を更に加速度的に推進できる体制となった。この国際企画課が本プログラムでCOIL実施予定の学部との連携のもとに、米国の大学との連携を行なっている。学務に属していることにより、教育プログラム開発に長けた国際企画課ということで評判も良い。この国際企画課と、教育全体を企画立案し実施する教育企画課、留学生課および全学の普遍教育の実施部門(千葉大学では教養教育を普遍教育と呼んでいる)の3つが連携してプログラムを実施している。これらは全て学務部にあるため、意思疎通も早く実行力も高い。これに、国際教養学部が連携し、日本人学生を派遣することで、万全な体制のもとに行なっている。

短期の留学においても、留学中の学生への個別支援は、SULAが行う。COIL JUSUでの現地での発表などは、教員が随行し、現地で学生を支援する。COIL +VIP 留学では、帰国後にレポートを提出させる。授業および生活(健康管理など)に関する課題や問題については、随時連絡可能な体制を取る。

学修における管理は、単位の互換と連携して実施している。各学部の留学と学務担当の教員は、授業及び単

位に関しての管理を行い、学部 4 年生の卒業研究や、修士課程・博士課程における研究の学修管理は、指導教員と SULA が連携して行う。現在千葉大学が推進しているスーパーグローバル大学創生支援で新たに設けられた学務の専門職員である SULA が、**本事業でも派遣および受入の両方の学生に対応する。**

また、危機管理については、留学生課と ISD が主体となり、外部の危機管理サービスを平成 23 年度より導入している。「留学生危機管理サービス OSSMA(オスマ)」(日本エマージェンシーアシスタンス株式会社)と、大学で契約し、平成29年度は短期派遣の学生に適用、平成30年度から交換留学生に拡大していく。

【計画内容】

本プロジェクトでは、留学前・留学中・留学後のトータルな派遣体制を構築して事業を支援する。

(1)《留学前》 本プロジェクトは、全学を対象に行い、そのプロジェクト・マネジメントは、全て国際教養学部の SULA が行う。学生の募集は、全学に対して実施する。**年2回開催する「千葉大学留学ガイダンス」で積極的に広報**し学生を選抜する。選抜された学生は、全学のプログラムとしてのこれまでの事前学習プログラムを利用し、COIL による学習の方法、そのメリットとともに米国文化や日本文化学習も行い留学準備する。特に留学する学生はその多くが COIL +VIP としてインターンシップやボランティアに行くため、必要な意識を十分獲得して留学する。

(2)《留学中》 COIL +VIP で留学する学生には、国際教養学部の **SULA が全体を通してプロジェクトのマネジメントを行う。**これにより、SULA+部局教員+部局学部が共同で実施する体制を取る。留学中の取組みの報告は、教員と SULA の両方に報告する。帰国後は、30 日以内に報告会を開催する。

現地の危機管理は、現地ではシンシナティ大学の IEC オフィスに対応する。また、米国に強い JTB の各支店(ニューヨーク支店、シカゴ支店、ヒューストン支店)との連携による危機管理のシステムも導入を予定している。特に、ニューヨーク支店は、米国の中心にあるため、4つの大学全てを基本的には網羅してもらう。また、そればかりではなく、現地の海外校友会のネットワークを最大限に利用し、安全な生活が送れるようにすることで、より一層の安心感を与える。

(3)《留学後》 事前学習と同様に、留学した学生を集めて、留学報告会の準備および開催と併せて必要な指導、フォローアップを実施する。留学報告会は、留学した学生のまとめであると同時に、次回派遣される学生の目的意識の明確化、留学希望学生への多様で多彩な情報の提供の場であり、**留学数拡大のスパイラルアップ**には重要な役割を担っている。また、留学で学生が心配するのが就職である。就職活動に近い学年で留学する場合は、学生と密に連絡を取ることで、学生の希望を各企業に伝え、グローバル人材が就職可能であるかを確認する。逆に、本プログラム参加学生は、米国に拠点を有する日本企業や海外の企業にも本取組を積極的に広報する。特に、プログラムで実施するインターンシップ実施企業への就職を積極的に推進する。

③ 関係大学間の連絡体制の整備

【実績・準備状況】

本事業の推進にあたり、平成29年11月複数回の打ち合わせを実施し、プログラムの参加を決定、その後オンラインでプログラム内容を詰め、平成30年3月にはこの4大学と採択後実施可能なプログラムを決定した。また、5月後半には更に内容の精査のために渡米し、マネジメントする国際教養学部の教授と SULA が詳細な打ち合わせを行う予定である。当初は米国の6校と連携予定であったが、打ち合わせの結果、今回の4大学となっている。この4大学はいずれも今回の COIL JUSU の目的とする「ユニーク・プログラム」に極めて高い興味があり、今回の構想に至っている。米国内での各大学においても、共通する科目については、連携が可能であると内諾を得ている。一方で、各大学は独自の e-learning システムであるため、オンラインのシステムを無理に一元化せずに進めて行く予定である。また、シンシナティ大学の IEC オフィスの戦略的利用も同意を得ている。

【計画内容】

本プログラムの実施に会わせて、シンシナティ大学の IEC オフィスを強化する。新たに現地でプログラムコーディネーターを採用し、4大学で実施するプログラムの支援を行ってもらう。このシンシナティ大学の IEC オフィスでは、主に以下の3点を推進する。また、この IEC は、学務部の国際企画課に属しているためマネジメント体制については問題ない。

(1)4大学の推進状況の確認と広報 各大学での推進状況を千葉大学で管理し、これらを広報する。同様に新しく専用のホームページを設置し、千葉大学を含む5つの大学から自由にアクセスし、逐次情報を追加していく。

(2)大学間連携によるプログラム開発の模索 構想段階では存在しない学問領域や、ニュー・メジャー向けの新しいプログラムの開発について、4大学内での連携の可能性について検討する。

(3)グッドプラクティス COIL の広報実施 プログラム実施中にシンシナティ大学での成果発表会の実施を予定している。本プログラムで目指す未来の雇用を創造するニュー・メジャーについて、本事業をきっかけに検討会などが実施できればと考えている。

事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 【①～②合わせて2ページ以内】

① 事業の実施に伴う大学の国際化

【実績・準備状況】

千葉大学では、大学の国際化の1つの指標として、海外拠点を以下の4つのカテゴリー、①キャンパス、②ICRC、③IEC、④海外オフィス、で整理して運営している。この全ての海外拠点は図4に示すように全てで **16存在** する。米国には現在2つの拠点があり、①キャンパスとして UCSD のサンディエゴ・キャンパス、**③IEC としてのシンシナティ大学** である。しかし、今回の事業では、サンディエゴ・キャンパスおよび UCSD はメンバーとなっていない。これは、キャンパスそれぞれで機能が違っており、サンディエゴ・キャンパスは、医学研究院が中心となり、粘膜免疫・アレルギー治療学の研究を主な目的とした共同研究のための拠点であるからである。

本事業では、シンシナティ大学に設置した IEC オフィスが中心となり実施する。また、本事業で予定している「災害看護」「都市緑化」「農業の6次産業化」などの授業は、アジア共通の課題でもあり、これらは、千葉大学のバンコク・キャンパスでも実施する。米国の学生がアジアに積極的に留学しないことに対して、日本ばかりでなく、アセアンと日本の関係を理解してもらう予定でもある。

千葉大学から提供するカリキュラムは、日本でしか学べないユニーク・プログラムである。これらのプログラムは、日本に留学している外国人学生からも魅力あるプログラムである。したがって、千葉大学では、積極的に、外国人学生を COIL JUSU に受け入れる。



図4 千葉大学の16の海外拠点

【計画内容】

千葉大学では、第三期中期計画におけるビジョンとして TOKUHISA PLAN (学長プラン) の国際化の項において「ネットワークの構築によるグローバル化」を掲げている。本事業で実施するプログラムは、この国際化の項の具体的なプログラムである。そして、本事業で実施するプログラムは、未来の雇用を創造する人材を育成するもので、ニュー・メジャーを創造する。これは、**新たな「文理混合のプログラム」**でもあり、全学の学生が参加可能なものである。これは、現在千葉大学が推進しているスーパーグローバル大学創成支援事業「グローバル千葉大学の新生－Rising Chiba University－」と強力に連携しながら進めることができる。スーパーグローバル大学創成支援事業では、国際教養学部を設置し、グローバル人材を育成することが一つの目標となっていた。この目標は、平成28年度に達成することができた。本事業は、この国際教養学部を更に強化させ、その上に日本で初めて文理混合でかつセルフ・デザイン・メジャー型の大学院の設置を目指すものである。この大学院では、大きく3つの目標があるが、その全てが本事業と合致しており、**「本事業＝千葉大学の国際化」**となっている。

(1) 文理混合+セルフ・デザイン・メジャーで未来の雇用を創造する人材を育成

国際教養学部の文理混合を更に発展させた大学院は、自らがメジャーを創造する大学院である。その大学院の共通科目として位置付けられる COIL JUSU は、大学院におけるプログラムの一角を担っている。

(2) スマート・ラーニングでどこでも学べる

COIL では、オンライン学習とメディア学習を併用して実施していく。このコンビネーションでどこでも学習できる環境をスマート・ラーニングで実践していく。本事業は、その仕組みを利用して展開する。そのために、日本と米国だけでなく、バンコクも含めて様々なプログラムの開発を実施していく。

(3) ワールド・スクールで国際教養学マイナーの運営

大学院のイノベーション・プログラムとして、植物工場、植物環境イノベーション、リビング・イノベーションなどのマイナープログラムをワールド・スクールとして実施している。これらは、一定の単位(修士8単位・博士4単位)でマイナーの修了証書を取得できるものとしている。これらのプログラムは、段階的に COIL JUSU の科目として設定し、全学の研究科の学生が履修できるものとする。

このように、全体を制度化することで、大学および部局が認める組織的かつ継続的な教育連携を実施でき、教員だけではなく、SULA や事務も一丸となって推進する。

② 国内外への情報提供の方法・体制、成果の普及

【実績・準備状況】

千葉大学では、日本語と英語のホームページを、同一のコンテンツで公開している。このトップページにあるグローバルメニューより、スーパーグローバル創生支援事業および世界展開力強化事業のページにアクセスできるようになっている。一方で、教育に関する公開事項である3ポリシー、シラバス、コース・ナンバリング・システム、カリキュラムツリーなどの公開も実施している。過去の世界展開力強化事業のプログラムは、全て英語での情報発信を行っており、ソーシャルネットワークを利用した情報発信、スマートフォン対応による学生へのリアルタイムな情報発信、プログラムにおける学生のディスカッション内容や、動画によるプログラムの紹介などで、プロジェクトの最先端の情報発信を行っている

(<http://design-cu.jp/code/>, <http://design-cu.xsrv.jp/puli/>)。

一方で、千葉大学は、グローバル関連プログラムを広く学外に開放している。これまで国立六大学連携コンソーシアム(新潟、金沢、岡山、長崎、熊本と千葉)において、グローバル関連のプログラムを アセアンの大学連合であるAUNと共同で開発してきた。これ以外にも、千葉大学が実施する海外派遣プログラムである、グローバル・スタディ・プログラムやグローバルインターンシップなども他大学に開放し、フィンランド、ギリシャ、マレーシア、ドイツなど世界中でプログラムを実施している。本事業もこれまでのグローバル関連プログラムの延長線上に位置づけ、同様のポリシーでプログラムを開放する。



図 5 千葉大学の英文ホームページ

【計画内容】

本事業も、これまでに獲得した世界展開力事業と同様、インターネットを利用し、英語を第一言語としてホームページを構築していく。特に、本プログラムでは、共同プログラムを実施するため、その授業科目等の情報を全て英語で公開する。更に、プロジェクトなどの成果も逐次公開し、充実した情報を公開する。なかでも、これまでの成果の中で学生の利用頻度が高かったのは、ソーシャルネットワークを利用した情報交換であった。したがって、スマートフォン対応のホームページも作成する。

また、本事業のプログラムについては、平成31年度より学外に開放する。平成30年度に開講したプログラムは、その内容を精査し、平成31年度以降も継続的に実施する。平成31年度は、COIL +VIP のプログラムを開発するために、新たなプログラムの開講はしないが、他の大学の学生を積極的に受け入れる。連携予定としては、一つは国立六大学であり、もう一つは千葉県内において単位互換等の連携をしている大学である。また、これらの連携大学には、将来的にはその大学でしか学ぶことができない日本の文化から最先端技術まで様々なプログラムを提供してもらう。このような連携にあたっては、以下の3つのことに注意しながら実施していく。

(1) プログラム参加学生へのリクワイアメント

千葉大学の学生と同様の語学力 CEFR B2+ (TOEFL iBT 80)と COIL 事前プログラムのメディアによる学習を参加の要件とする。参加の人数はこれらのレベルチェックのもと、最大予定人数の360名の20%の72名まで受け入れていく。

(2) 連携先のユニーク・プログラムの開発

連携予定の大学のうち、国立六大学は、関東以外の地域に存在している。そのため、その地域でのユニークなプログラムが見られる。これらの大学と連携してユニーク・プログラムを開発する。プログラムの設置は、早ければ本事業期間内に実施するが、平成35年度以降の自立時にも開発を継続する。

(2) インターンシップ先の連携

千葉大学では、現在 COC+で県内の大学と連携している。これらをもとにまずは、千葉県の中でのユニークなインターンシップを他の大学との連携のもとに拡大する。また、上記のユニーク・プログラムと並行して、関東圏以外においてもそれぞれの大学と連携してインターンシップ先を開発する。

以上のように、国内への情報の提供から、他の大学とのプログラムの開発、COIL +VIP の開発など、様々な連携を行い、広く広報していく。

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】								
相手大学名 (国名)	アラバマ大学 (米国)							
① 交流実績 (交流の背景)								
<p>千葉大学とアラバマ大学との交流は、昭和 59 年度より 34 年にわたる、長期間かつ継続的な実績を有している。昭和 59 年度に、まず看護学部が最初に結んできた部局間学術交流協定を、大学間学術交流協定にあげ締結している。したがって、それ以前の交流も含めるとおよそ 40 年近い交流の歴史がある。</p> <p>この大学間学術交流協定の締結により、本格的な研究交流を進めた。その後、10年の研究交流を経て、大学間学生交流協定の締結に至っている。この間、語学研修としての派遣は、大学間交流協定のもとに行われてきている。現在は、看護学部、法政経学部、国際教養学部が教育および研究の分野において交流を行っている。これまでのアラバマ大学との交流の一部を表6に示す。</p>								
表6 アラバマ大学との交流(一部)								
No.	派遣 受入	交流 目的	学部 大学院	担当 部局	交流のテーマ等	概要	年間 人数	その他
1	派遣	教育	学部	国際 教養	海外研修 英語	6タームに4週間の短期留学を実施し語学研修を行う 2,4単位を取得する	30	
2	派遣	教育	学部	国際 教養	海外研修 英語文化	6タームに4週間の短期留学を実施し米国の文化を体験する 2,4単位を取得する	30	
3	派遣	教育	学部	全学	長期留学	各学部から申請し専門領域の1年間の留学を行う 文学部、教育学部など	2-4	
4	派遣	教育 研究	学部	看護	異文化看護演習 海外スタディツアー	米国における看護の現状を学習する 2-4単位を取得する	30	COIL 型
5	派遣	研究	学部	看護	精神看護	精神看護に関する研究交流 異文化看護に関する研究交流	—	
6	受入	教育	学部	全学	J-PAC	J-PACで日本文化学習および日本語学習 半年、1年の2つお期間で実施	2-4	COIL 可能
7	受入	研究	大学院	看護	睡眠研究	アラバマ大学の看護学部教員を研究受入 研究交流以外にも特別公演など実施	—	
② 交流に向けた準備状況								
<p>平成 29 年 12 月に、学内において、アラバマ大学と連携の強い、国際教養学部と看護学部の教員と相談をし、COIL を利用した学習プログラムの構築の可能性について、両方の学部とも可能性があることを確認した。その後、直ちにアラバマ大学に国際企画課よりプログラム参加の可能性について打診を行い、快諾を得ている。</p> <p>その後、COIL JUSUとCOIL +VIPの構想をまとめ、メールにてアラバマ大学の Associate Provost である Teresa E. Wise 教授に説明を行った結果、全学を上げて積極的に関わりたいとの返信をいただくことができた。更に、平成 30 年 4 月初旬に国際担当理事および国際企画課担当職員が、先方の国際教育の担当部門である Capstone International Center, Education Abroad の Director である Carolina Robinson 教授と、スカイプ会議を行い、プログラムの詳細について討議を行った。その際、本来予定していた国際教養学部と看護学部との連携だけではなく、<u>千葉大学およびアラバマ大学の両方にある教育学部を中心とした社会教育として、「ソーシャル・エデュケーション」を最初に COIL JUSU として提供したいとの申し出</u>があり、本学の教育学部と相談の上、実行可能であるとの判断に至っている。</p> <p>また、千葉大学からは、看護学部からのプログラムの提供を予定している旨を伝え、了解されている。下記が、現在アラバマ大学から提供してもらう科目と、千葉大学がアラバマ大学に提供する予定の科目である。これ以外にも従来からある英語文化などについては、COIL 型での実施が可能であるかを模索し、双方の合意のもと実施していく。</p>								
表7 アラバマ大学から提供予定の科目								
大学	授業科目	概要	ナンバ	学期	単位	学期	対応専門	
アラバマ	(1) Social Education (2) Civil Study (3) Global IPE	社会学習とグループワーク 教育プログラム開発 社会参加型研究 社会課題をテーマとした研究 医・薬・看護連携実践型教育プログラム	300 500 院 300	6T 5T 1T	1 1 1	6T 5T 1T	教・国際 国際教養 医・薬・看	
表8 アラバマ大学へ提供する予定の科目								
領域	主担当学部	授業科目	概要	ナンバ	主担当学部	単位	学期	
生命 科学	看護 看護 医・薬・看 医・工	(1) 災害看護 緊急時看護 (2) 高齢者看護 高齢者医療 (3) グローバル IPE (4) 医工学 医療システム	過去の災害の経験による看護対策 人生100年における高齢者看護 医学+薬学+看護学の共同学習モデル 画像センシングの医療応用	300 500 院 500 院 500 院	看護 看護 医・薬・看 医・工	1 1 1 1	4T 5T 1T 3T	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】								
相手大学名 (国名)		シンシナティ大学 (米国)						
① 交流実績 (交流の背景)								
<p>千葉大学とシンシナティ大学との交流は、平成 23 年度よりスタートし、現在で6年が経過している。交流のきっかけは、工学のデザイン分野で、千葉大学の大学院の修了生である Peter Chamberlain 教授がシンシナティ大学の教員となったことから始まっており、教員同士の連携は平成 22 年度より始まっている。平成 24 年度の大学間学術・学生交流協定の締結直後から活発に交流が始まり、これまでにシンシナティ大学からは 8 回、延べ 20 名以上の教員を招聘し、研究・教育活動を行っている。</p> <p>また、平成 23 年度に世界展開力強化事業タイプ B に採択された「大陸間デザイン教育プログラム (CODE Program)」のメンバーであり、これまでに 20 名近い学生交流が実現している。更に、平成 28 年度には、Santa J. Ono 学長が本学に来訪し、本学で新たに開設した国際教養学部 of 開設記念シンポジウムにて講演を行ったほか、「国際交流センター」(International Exchange Center :IEC) オフィスを相互に設置する協定を締結した。現在は、デザイン分野の他に、文学、社会科学の分野の他、医・薬学等広範囲にわたり、学生・教職員の交流が拡大している。</p>								
表9 シンシナティ大学との交流(一部)								
No.	派遣 受入	交流 目的	学部 大学院	担当 部局	交流のテーマ等	概要	年間 人数	その他
1	派遣	教育	学部 大学院	工	CODE 交換留学	1セメスターから1年間シンシナティ大学で米国デザインについて学ぶ	1-2	COIL 可能
2	受入	教育	学部 大学院	工	CODE 交換留学	1セメスターから1年間千葉大学でデザインについて学ぶ	2-6	COIL 可能
3	派遣	研究	学部 大学院	国際	日本文化研究交流	シンシナティ大学において日本文化の研究交流を実施	1-2	COIL 連携可能
4	派遣	研究	学部 大学院	工	サービス・デザイン研究	シンシナティ大学においてサービス・デザインの研究交流を実施	1-2	COIL 連携可能
② 交流に向けた準備状況								
<p>平成 29 年 11 月に、学内において、シンシナティ大学と連携の強い、工学部の教員と相談をし、COIL を利用した学習プログラムの構築の可能性について可能性があることを確認した。その後、直ちにデザイン系の教員がシンシナティ大学に赴き、Peter Chamberlain 教授と打ち合わせを行い、快諾を得ている。</p> <p>その後、COIL JUSU と COIL +VIP の構想をまとめ、メールにてシンシナティ大学の Vice Provost for International Affairs である Raj Mehta 教授に説明を行った結果、全学を上げて積極的に関わりたいとの返信をいただくことができた。更に、平成 30 年3月に国際担当理事および国際企画課担当職員が、先の Raj Mehta 教授および先方の実務担当者である Director of International Strategic Partnerships の Jenni Kim Suttmoller 氏と、スカイプ会議を行い、プログラムの詳細について討議を行った。その際、本来予定していた工学部との連携だけではなく、<u>シンシナティ大学の強みの一つであるコスメティック・サイエンスと、もう一つの強みであるビジネスについて COIL JUSUとして提供したいとの申し出</u>があり、本学の薬学部や工学部および理学部、法政経学部と相談の上、実行可能であるとの判断に至っている。</p> <p>また、工学部からは、現在の「大陸間デザイン教育プログラム (CODE Program)」を COIL JUSU に発展させること、国際教養学部からは、「能・狂言 日本古典芸能」や「禅と日本文化」も提案され、複数の領域で連携することが確認できている。</p>								
表 10 シンシナティ大学が提供を予定する授業								
大学	授業科目	概要	ナンバ	学期	単位	学期	対応専門	
シンシナティ	(1) Cosmetic Science	化粧品学 化粧品科学 化粧品利用学	400	3T	1	3T	理・工・薬	
	(2) Business	ビジネス・モデル学習 ケース・スタディ	400	6T	1	6T	法政経	
	(3) Landscape	建築・園芸・デザイン複合型ランドスケープ	500 院	1T	1	1T	園芸・工	
表 11 シンシナティ大学へ提供を予定する授業								
領域	主担当学部	授業科目	概要	ナンバ	主担当学部	単位	学期	
自然科学	園芸 工・園芸 園芸・国際 理・工	(1) 完全人工植物工場	人工光型植物の技術革新	300	園芸	1	3T	
		(2) 造園学	自然を利用した造園学	500 院	工・園芸	1	6T	
		(3) 都市緑化 環境問題	過密都市の屋上緑化による空間利用	500 院	園芸・国際	1	1T	
		(4) イメージ・センシング	アジアの画像診断による環境課題の解決	500 院	理・工	1	4T	
社会科学	国際教養 国際教養	(1) 能・狂言 日本古典芸能	日本の伝統芸能のこれまでとこれから	300	国際教養	1	4T	
		(2) 禅と日本文化	日本の伝統文化と禅	400	国際教養	1	4T	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

相手大学名 (国名)	ニュースクール大学 (米国)
---------------	----------------

① 交流実績 (交流の背景)

千葉大学とニュースクール大学との交流は、平成 23 年度に大学間学術・学生交流協定を締結したことから本格的な連携が始まっている。平成 10 年度より、教員間の連携を行い、平成 23 年度に世界展開力強化事業タイプ B 「大陸間デザイン教育プログラム (CODE Program)」を申請し採択され、プログラム実施とともに多様な展開が始まっている。ニュースクール大学は連合大学であり、この CODE では、名門のデザインスクールであるパーソンズとの連携を行っている。

連携の内容は、千葉大学・パーソンズ(ニュースクール大学)・グラスゴー美術大学(英国)と共同でグローバル・プロダクト&サービス・デザイン・プログラムを実施している。現在も実施しており、企業からテーマを提示してもらい、このテーマに沿って3校がプロダクト&サービス・デザインの提案をし、ディスカッションしながら最終的なプロダクト&サービス・デザインを決定していくものであり、COIL そのものでもある。このように、連携授業を実施しており、これをもとに今回の COIL JUSU でもデザインを中心に進めていくものである。

表 12 ニュースクール大学との交流(一部)

No.	派遣 受入	交流 目的	学部 大学院	担当 部局	交流のテーマ等	概要	年間 人数	その他
1	派遣 受入	教育	学部 大学院	工	プロダクト&サービス・デザイン・プログラム	1年間の共同学習プログラムであり、企業からのテーマを受けて実施する実践型授業	40	COIL
2	派遣	教育	学部 大学院	工	CODE	1セメスターの交換留学で米国のデザイン・ビジネスを学ぶ	1-4	COIL 連携
3	受入	教育	学部 大学院	工	CODE	1セメスターの交換留学で日本で日本型のデザイン・イノベーションを学ぶ	1-4	COIL 連携
4	派遣	教育	大学院	工	サービス・デザイン研究	千葉大学の教員がパーソンズでデザイン・ビジネスとサービス・デザインについて研究	1-2	COIL 連携

② 交流に向けた準備状況

平成 29 年 12 月に、学内において、パーソンズと連携の強い、工学部の教員と相談をし、COIL を利用した学習プログラムの構築の可能性があることを確認した。その後、直ちにパーソンズに本学国際企画課よりプログラム参加の可能性について打診を行い、快諾を得ている。

平成 30 年3月に、本学の国際担当理事が、先方のパーソンズの Assistant Dean, Academic Planning & Global Initiatives の Mike Fu 教授に COIL JUSU と COIL +VIP の構想をまとめメールにて説明を行い、全学を上げて積極的に関わりたいとの快諾を得ることができた。

また同年4月には、改めて国際担当理事および国際企画課担当職員が、前述の Mike Fu 教授と、スカイプ会議を行い、これまでに、COIL と全く同じような共同教育を CODE で実施していることより、これらのエビデンスを利用して COIL に転換することが十分可能あることが確認できた。このように、現在の「大陸間デザイン教育プログラム (CODE Program)」を COIL JUSU に発展させることで連携することが確認できている。また、米国の大学だけではなく、可能であれば現在実施しているグローバル・プロダクト&サービス・デザイン・プログラムのスキームを利用して、グラスゴー美術大学(英国)をも含めた形での COIL が考えられないかについても提案を受けており、採択のおりには3つの大学での連携の可能性についても推進していくことで、千葉大学も了解している。

表 13 ニュースクール大学が提供を予定する授業

大学	授業科目	概要	ナンバ	学期	単位	学期	対応専門
ニュー スクール	(1) Business Innovation	ニュー・ビジネス・モデルによるイノベーション立案 デザイン思考モデルの適用 社会サービスのグランド・デザイン開発	300	4T	1	4T	工・国際
	(2) Design Thinking		400	4T	1	4T	工・国際
	(3) Service Design		500 院	6T	1	6T	工・国際

表 14 ニュースクール大学へ提供を予定する授業

領域	主担当学部	授業科目	概要	ナンバ	主担当学部	単位	学期
自然 科学	園芸 工・園芸 園芸・国際	(1) 完全人工植物工場	人工光型植物の技術革新 自然を利用した造園学 過密都市の屋上緑化による空間利用	300	園芸 工・園芸 園芸・国際	1	3T
		(2) 造園学		500 院		1	6T
		(3) 都市緑化 環境問題		500 院		1	1T
社会 科学	園芸・国際 工・国際	(3) 農業の6次産業化	生産加工販売の統合型農業の未来技術 日本の縮図である千葉に学ぶ日本の未来	500 院	園芸・国際 工・国際	1	6T
		(4) コミュニティ再生ケア		500 院		1	3T

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

相手大学名 (国名)	ストーニーブルック大学 (米国)
---------------	------------------

① 交流実績 (交流の背景)

千葉大学とストーニーブルック大学との交流は、平成2年度頃から文学部を中心に交流が開始されていた。その後、平成8年度には、大学間学術・学生交流協定を締結することとなり、以来 22 年に渡り交流がなされている。これまでの交流では、J-PAC の学生の受け入れが多く、米国の他の大学よりも積極的に学生が千葉大学への留学を希望してきている。その専門領域は、一番連携の強い文学部だけにとどまらず、工学部や園芸学部にも及んでいる。

現在は、理学部・工学部の自然科学系、法政経学部などの人文社会科学における研究を始めとし、かなり親密な研究交流を展開している。中でも文学部の言語学における研究交流は、一番盛んに行われている分野である。また、ストーニーブルック大学は、ニューヨーク州立大学の一部であることより、この度の COIL の推進の一番強い COIL センターを有していることもわかった。

以下にこれまでの、ストーニーブルック大学との教育および研究における交流の一部を表 14 に示す。この表からもわかるように、教育に置ける連携がとて強く、今後も教育における連携を強化することで協定を継続することが合意されている。

表 15 ストーニーブルック大学との交流(一部)

No.	派遣 受入	交流 目的	学部 大学院	担当 部局	交流のテーマ等	概要	年間 人数	その他
1	派遣	教育	学部	全学	長期留学	各学部から申請し専門領域の1年間の留学を行う 文学部、教育学部など	2-4	
2	受入	教育	学部	全学	J-PAC	J-PAC で日本文化学習および日本語学習 半年、1年の2つお期間で実施	2-4	COIL 連携
3	派遣	研究	大学院	文	言語法の研究	文学部の言語法の教員が連携研究を実施 共同研究について連携	—	

② 交流に向けた準備状況

平成 29 年 12 月に、学内において、ストーニーブルック大学と連携の強い、文学部の教員と相談し、COIL を利用した学習プログラムの構築の可能性について、両方の大学とも可能性があることを確認した。その後、直ちにストーニーブルック大学に本学国際企画課よりプログラム参加の可能性について打診を行い、快諾を得ている。

その後、COIL JUSU と COIL +VIP の構想をまとめ、メールにてストーニーブルック大学の Vice Provost for Global Affairs である Jun Liu 教授に説明を行った結果、全学を上げて積極的に関わりたいとの返信をいただくことができた。

同時に Jun Liu 教授を介して、ニューヨーク州立大学のコイルセンターの Sally Crimmins Villela 教授と Mary Lou 教授を紹介され、プログラムの詳細について検討を進めている。ニューヨーク州立大学では、すでに 64 の州立大学(公立大学)とニューヨークで COIL を確立しており、**SUNY COIL center からも本プログラムで実施するプログラムを支援していただけるという了解**を得ている。COIL が各大学の特別なプログラムを提供しているものことより、本事業で実施する COIL JUSU は COIL の目的に合致しており、多様な情報も供給するという協力に関する賛同も得られている。

表 16 ストーニーブルック大学が提供を予定する授業

大学	授業科目	概要	ナンバ	学期	単位	学期	対応専門
ストーニー ブルック	(1) Art & Entertainment	米国の先端エンターテインメントと芸術	300	4T	1	4T	文・国際
	(2) American Literature	米国の文学 日本との違い	400	4T	1	4T	文・国際
	(3) Wellness	ウエルネス 健康と予防 快適な生活	500 院	6T	1	6T	医・国際

表 17 ストーニーブルック大学に提供を予定する授業

領域	担当学部	授業科目	概要	ナンバ	担当学部	単位	学期
自然 科学	工・園芸 園芸・国際	(2) 造園学	自然を利用した造園学	500 院	工・園芸 園芸・国際	1	6T
		(3) 都市緑化 環境問題	過密都市の屋上緑化による空間利用	500 院		1	1T
社会 科学	国際教養 国際教養 園芸・国際 工・国際	(1) 能・狂言 日本古典芸能	日本の伝統芸能のこれまでとこれから	300	国際教養 国際教養 園芸・国際 工・国際	1	4T
		(2) 禅と日本文化	日本の伝統文化と禅	400		1	4T
		(3) 農業の6次産業化	生産加工販売の統合型農業の未来技術	500 院		1	6T
		(4) コミュニティ再生ケア	日本の縮図である千葉に学ぶ日本の未来	500 院		1	3T

本事業の実施計画、評価体制 【①は1ページ以内、②、③、④は合わせて2ページ以内】	
① 年度別実施計画	
【平成30年度（申請時の準備状況も記載）】	
米国4大学との連携プログラムについて、採択後、速やかに実施するとともに、以下の6つを計画する。	
(1) COIL JUSU プログラムを <u>米国4プログラム、千葉大学4プログラムの8プログラム構築</u>	
(2) <u>プログラム参加学生数、年間目標180人</u> を目標に実施する	
(3) COIL 事前プログラムの実施 <u>ビデオ・コンテンツ化</u>	
(4) <u>ユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの施行</u>	
(5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発</u> <u>ニュー・メジャーのモデルのデータ蓄積</u>	
(6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻の国際教養学大学院の設置準備</u> (平成32年度)	
初年度に 1/3 のプログラムを開発し、実施する。また、様々な体制について実施・運営体制を整備していく。	
【平成31年度】	
初年度の COIL JUSU に連携する COIL +VIP プログラムを開発し実施する。米国より 20 名の学生を受入る。	
(1) COIL JUSU プログラム 8プログラム継続実施 <u>新規8プログラム開発</u>	
(2) <u>プログラム参加学生数、年間目標180人、COIL +VIP 参加学生年間目標20人</u>	
(3) <u>COIL +VIP 実施 6単位取得プログラム設置の準備と実行</u>	
(4) <u>ユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの施行</u>	
(5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発</u> <u>ニュー・メジャーのモデルのデータ蓄積継続</u>	
(6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻の国際教養学大学院の設置準備</u>	
平成 32 年度に追加実施する COIL JUSU の8プログラムの打ち合わせを実施し、スムーズに開発する。	
【平成32年度】	
平成 30 年度に開発したプログラムと同数を開始し、学内で COIL を拡大させる。米国以外とも開始する。	
(1) COIL JUSU プログラム <u>新規8プログラム開始</u> 16 プログラム実施	
(2) <u>プログラム参加学生数、年間目標360人、COIL +VIP 参加学生年間目標28人</u>	
(3) <u>COIL +VIP 実施 6単位取得プログラムの実行</u>	
(4) <u>ユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの施行</u> <u>バンコク・キャンパスへ展開</u>	
(5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発</u> <u>ニュー・メジャーのモデルのデータ蓄積継続</u>	
(6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻の国際教養学大学院の開始</u>	
米国以外との COIL JUSU プログラムの開発と実行。米国以外での COIL の特徴把握と対応。	
【平成33年度】	
平成 32年度に開発した COIL JUSU プログラムの COIL +VIP を開発し実施する。自立化についての本格検討。	
(1) COIL JUSU プログラム 16 プログラム継続実施 <u>新規8プログラム開発</u>	
(2) <u>プログラム参加学生数、年間目標360人、COIL +VIP 参加学生年間目標28人</u>	
(3) <u>事前+COIL JUSU+事後+COIL +VIP で6単位取得プログラム実施</u> <u>年間 25 名を目標</u>	
(4) <u>自立化後のユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの継続的実施方法の検討</u>	
(5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発</u> <u>ニュー・メジャーのモデル継続開発</u>	
(6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻 修了生輩出予定</u>	
平成 35 年以降の自立化についての本格検討。海外キャンパスとの連携利用の検討とその実施。	
【平成34年度】	
最終年度の最大の目標は平成 35 年度以降の自立化についての最終調整である。	
(1) COIL JUSU 24プログラムの実施 <u>米国大学 12 プログラム 千葉大学 12 プログラムの 24 プログラム構築</u>	
(2) <u>プログラム参加学生数、年間目標540人</u> 、COIL +VIP 参加学生年間目標28人	
(3) <u>事前+COIL JUSU+事後+COIL +VIP で6単位取得プログラム実施</u> <u>年間 25 名を目標</u>	
(4) <u>自立化後のユニーク・スマート・ラーニング・プログラムの継続的実施方法の決定</u>	
(5) <u>ニュー・メジャーのラーニング・モデルの開発</u> <u>ニュー・メジャーのモデル継続開発</u>	
(6) <u>セルフ・デザイン・メジャー専攻 修了2期生輩出予定</u>	
以上のように、開発すべきプログラム数とその内容、および参加学生に関する達成目標をもとに、「未来の雇用を創造し、自らを雇用する人材」を育成していく。	

② 交流プログラムの質の向上のための評価体制

評価体制は、2つの評価を行い、最終的には学長の元、評価の結果から次の進むべき方向を決定していく。2つの評価は、以下の通りである。

(1) 国際未来教育基幹による教育プログラムの質保証

本事業で開発する交流プログラムは、新たな教育プログラムである。このような教育プログラムの質保証に関しては、平成 28 年度に発足した国際未来教育基幹が行なっている。国際未来教育基幹は、学長直轄の基幹であり、意思決定会議としての「基幹キャビネット会議」が存在している。この基幹キャビネット会議は、外部の教育に関する有識者5名(女性、外国人も含む。)と、学内メンバー7名により構成され、2ヶ月に1回程度の割合で開催し、大学全体の教育に関する質の保証を実施している。本プログラムも、この基幹キャビネット会議で評価を受けながら実施していく。外部の有識者の中には、米国の大学に勤務し、COIL やオンライン教育に精通した方や、外国人もおり、今回のような新しいプログラムの良し悪しについて、適切な判断を下していただいている。

本事業採択後は、この基幹キャビネット会議に、本事業の教育プログラムの質保証に関する業務を付帯し、その教育効果が計画通り進行しているかを評価していく。

(2) 事業実施の適正評価

一方、事業が適正に実施されているかについては、経営協議会において実施する。経営協議会は外部委員14名と学内委員13名である。産業界や外国人外部委員など多様な委員から、千葉大学の経営に関わる全ての事業について最終決定を得ている。中でも、グローバル教育についてはその経験者が多く、多様な示唆に富んだ指摘をいただいている。この経営協議会においても、2ヶ月に一度の報告を実施する。プログラムの内容はもとより、適正な費用で適正に実施されているかについて評価を受け、修正・変更などを適宜実施していく。

このように、全学でプログラムを実施することを受けて、教育プログラムの質保証については、基幹キャビネット会議で、事業実施の適正評価については、経営協議会で実施するという2つの視点より評価していく。

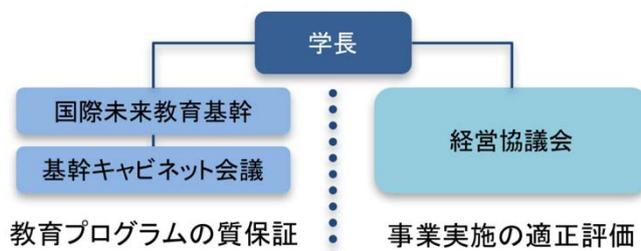


図 6 評価体制

③ 補助期間終了後の事業展開

千葉大学では、現在、トリプル・ピーク・チャレンジとして、生命科学系(医学部・薬学部・看護学)・人文社会科学系(国際教養学部・文学部・法政経学部・教育学部)・理工系(理学部・工学部・園芸学部)と、領域を3つに分けて共同教育や共同研究を行なっている。このトリプル・ピーク・チャレンジにおける大学院教育も各系において共通教育の実施や、大学全体で高度な教養を涵養する大学院共通教育を開始している。

本事業で実施するプログラムは、国際教養学部がマネジメントする。これは、終了後も同様である。国際教養学部は、全学の教養教育を担う学部でもあり、継続的な実施体制としては万全である。補助期間終了後の継続的な事業展開としては、以下の Smart COIL、COIL JUSU、COIL +VIP、COIL SICRとなる。これに、現在構想しているジョイント・ディグリーやダブル・ディグリーへの展開も補助期間終了後の展開として検討する。

●Smart COIL

アカデミック・リンク・センターおよびイノベーション教育センターを中心として、アクティブ・ラーニングの新たなフェーズとして実施していく。事業期間内に、同時に進行しているスマート・ラーニングの一部として、Smart COIL を実施する。このスマート・ラーニングはバンコク・キャンパスにまず主眼を置いて開発するものであったが、本事業はそのシステムや環境を利用して実施する。機器等の投資の必要はなく、継続的な実施が可能である。

●COIL JUSU

期間中に開発する24のプログラムのうち、千葉大学が新たに提供する12プログラムについては何ら問題もなく補助期間終了後も実施できる。米国の12プログラムについても補助期間終了後の継続について依頼をしている。これら 12 の米国からのプログラムのうち、これまで教員間のコミュニケーションがあった専門領域については、問題なく継続できるとの対応があった。この先新たに連携を始める現代日本学や教育学の分野では、十分な打ち合わせを行い、将来的に継続した連携を実施する。また、大学院にはこれまで以上に共同プログラムを設置する。期間中に 研究型共同教育として、COIL +RESを設置したいと考えている。

●COIL +VIP

これまで実施してきた、グローバルボランティアとグローバルインターンシップは年間100名程度の学生が参加

して実施されている。本事業では、このシステムを利用するため、補助期間終了後も継続的に実施することが可能である。COIL +VIP における唯一の課題は、プログラムに参加するための渡航および滞在費用である。インターンシップについてはすでにその一部あるいは全部を企業が負担する仕組みになっている。ボランティアについては、各種奨学金や大学独自の奨学金で実施していく。このように、外部との連携により資金を調達できるようにし、補助期間終了後も継続させる。

●COIL SICR

6単位プログラムである、COIL SICR は、自立語も関連する授業を問題なく実施できる。更に、この COIL SICR の修了学生には、積極的に千葉大学が履修証明書を付与している「国際日本学」を取得するためにも、他の COIL JUSU の履修を推奨し、ニュー・メジャーを創造する学生として育成する。

●COIL JDDD

ジョイント・ディグリーやダブル・ディグリーについては、申請段階ではシンシナティ大学と進めている。COIL JUSU での教育課程やラーニング・アグリーメントを発展させ、JD あるいは DD を構築する。特に JD で求められている共同教育科目を COIL で実施することで、学習時間や移動時間の大幅な削減ができ、実現可能性が上がることを双方で期待して検討に入っている。

以上のように補助期間終了後も単なる継続だけではなく、更なる発展を求めて実施する。

④ 補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画

本事業は、教育の改革そのものであり、千葉大学が目指すスマート・ラーニングの一翼を担っている。そのため、大学の教育のための学長裁量経費を投入するとともに、可能な限り自己資金で運営していく。また、本事業は、千葉大学と米国の4大学で実施するとともに、COIL +VIP の企業や自治体との連携も不可欠である。一方で、目的とする「未来の雇用を創造する人材」は、様々な雇用の可能性があるため、COIL JUSU に企業スポンサーを招聘し、プログラムのユニークさと人材の多様さを感じてもらい、教育および研究へ資金を提供してもらう。したがって資金計画は、(1)学長裁量経費等の自己資金、(2)教育寄附金(SEEDS 基金)と(3)教育奨学寄附金、(4)共同研究や寄附講座、(5)産学連携インターンシップ、(6)その他を想定している。下記は、あくまでも概算であるが、企業の事業規模が拡大するに伴い、資金の支援も拡大し、潤沢な資金での事業展開を計画する。

(1)学長裁量経費等の自己資金 3,000,000～6,000,000 円

学長裁量経費を利用し、イノベーション教育を推進させる経費を継続的に投入する。これは、補助期間中も自己資本として投入しているものを継続的に利用する。

(2)教育寄附金(SEEDS 基金)0 円～3,000,000 円

千葉大学寄附金である SEED 基金から、学生の留学に関する支援を行ってもらう。補助期間中も必要に応じて、教育寄附金(SEEDS 基金)を用いて学生を渡航させる。

(3)教育奨学寄附金 0 円～5,000,000 円

奨学寄附金は、基本的には学生の支援に利用する。主に修士および博士の研究への支援とする。本事業の連携企業先より寄附を募る。(算出根拠)1企業あたり、1,000,000 円×0～5企業=0～5,000,000 円

(4)共同研究や寄附講座 0 円～15,000,000 円

プロジェクトの進行過程において発掘された新たな産業(雇用)については、技術開発が必要である。これらの技術開発については、企業から共同研究でスポンサーしてもらう。また、可能であれば、寄附講座として大学に寄贈してもらい、それを継続する。寄附講座は、専門研究員を1名から複数名雇用できる規模とし、あまり大きくせず実施する。共同研究の実施など、年度更新が不可能な部分を補填する意味で、継続的な雇用を寄附講座で実現する。(算出根拠)1研究テーマあたり、3,000,000 円×年間0件～5件程度=0～15,000,000 円

(5)産学連携インターンシップ 0 円～2,500,000 円

学生のモビリティ向上には、奨学金や交通費等の資金援助が必要である。そこで、補助期間終了後は、企業でインターンシップを行うのに合わせて来日したり渡航したりすることで、企業が交通費及び滞在費を負担し、学生のモビリティを維持する。COIL +VIP の学生の 1/4 程度を優先産学連携インターンシップとして採択し補助する。(算出根拠)年間40(人月)×(100,000(円)(滞在費)+150,000(円)(交通費))×1/4=2,500,000 円

(6)その他 0～10,800,000 円

COIL JUSU プログラムをショート・プログラムとして海外の大学に提供し、授業料収入を得る。(算出根拠)1プログラム3,600,000 円×0～3プログラム=0～10,800,000 円

以上をまとめると、最低3,000,000 円～最高42,300,000 円の収入が可能であると計画でき、十分な事業展開が可能であると考える。なお本予算は、中間評価までに精査し、事業化の可能性により上下する。

補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】

補助金申請ができる経費は、当該事業の遂行に必要な経費であり、本プログラムの目的である大学の世界展開力強化のための用途に限定されます。(平成30年度大学の世界展開力強化事業公募要領参照。)

(単位:千円)

<平成30年度>	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	2,340		2,340	
	①設備備品費	1,000		1,000	
	・プロジェクト用サーバー	1,000		1,000	
	・				
	②消耗品費	1,340		1,340	
	・グループ・プロジェクト・ソフトウェア	1,200		1,200	
	・ポスター印刷用紙等	140		140	
	・				
	[人件費・謝金]	5,940	1,500	7,440	
	①人件費	3,600	1,500	5,100	
	・IECオフィス研究員雇用 @200,000/月*6	1,200		1,200	
	・プログラムコーディネーター @400,000/月*6	2,400		2,400	
	・非常勤職員雇用 @250,000/月*6		1,500	1,500	
	②謝金	2,340		2,340	
	・非常勤講師等謝金 @6,500*30h*8名	1,560		1,560	
	・外国招聘教員講演 @6,500*20h*6名	780		780	
	・				
	[旅費]	6,600	1,500	8,100	
	・4校との打合せ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・COIL +VIP教員受け入れ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・国内企業インターンシップ打合せ旅費	200		200	
	・IECオフィス職員派遣SD @1,500,000*1名		1,500	1,500	
	・				
	・				
	[その他]	10,120		10,120	
	①外注費	3,000		3,000	
	・ホームページ作成	2,000		2,000	
	・プロジェクトビデオ制作	1,000		1,000	
	・				
	②印刷製本費	600		600	
	・プロジェクト中間報告レポート印刷	600		600	
	・				
	③会議費	400		400	
	・キックオフミーティング会場借用	400		400	
	・				
	④通信運搬費	120		120	
	・IECオフィス用通信費 @20,000*6月	120		120	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	6,000		6,000	
	・学生派遣支援 @200,000*15人	3,000		3,000	
	・学生受入支援 @200,000*15人	3,000		3,000	
	・				
平成30年度	合計	25,000	3,000	28,000	

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

(前ページの続き)

＜平成31年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	1,140		1,140	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	1,140		1,140	
	・グループ・プロジェクト・ソフトウェア	1,000		1,000	
	・ポスター印刷用紙等	140		140	
	・				
	[人件費・謝金]	7,140	3,000	10,140	
	①人件費	4,800	3,000	7,800	
	・IECオフィス研究員雇用 @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・プログラムコーディネーター @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・非常勤職員雇用 @250,000/月*12		3,000	3,000	
	②謝金	2,340		2,340	
	・非常勤講師等謝金 @6,500*30h*8名	1,560		1,560	
	・外国招聘教員講演 @6,500*20h*6名	780		780	
	・				
	[旅費]	6,600		6,600	
	・4校との打合せ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・COIL +VIP教員受け入れ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・国内企業インターンシップ打合せ旅費	200		200	
	・				
	・				
	・				
	[その他]	7,620		7,620	
	①外注費	800		800	
	・ホームページ更新	300		300	
	・プロジェクトビデオ制作	500		500	
	・				
	②印刷製本費	300		300	
	・プロジェクト中間報告レポート印刷	300		300	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	120		120	
	・IECオフィス用通信費 @10,000*12月	120		120	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	⑥その他(諸経費)	6,400		6,400	
	・学生派遣支援 @160,000*20人	3,200		3,200	
	・学生受入支援 @160,000*20人	3,200		3,200	
	・				
平成31年度	合計	22,500	3,000	25,500	

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

(前ページの続き)

＜平成32年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	280		280	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	280		280	
	・グループ・プロジェクト・ソフトウェア	200		200	
	・ポスター印刷用紙等	80		80	
	・				
	[人件費・謝金]	6,750	3,000	9,750	
	①人件費	4,800	3,000	7,800	
	・IECオフィス研究員雇用 @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・プログラムコーディネーター @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・非常勤職員雇用 @250,000/月*12		3,000	3,000	
	②謝金	1,950		1,950	
	・非常勤講師等謝金 @6,500*30h*8名	1,560		1,560	
	・外国招聘教員講演 @6,500*20h*3名	390		390	
	・				
	[旅費]	6,500		6,500	
	・4校との打合せ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・COIL +VIP教員受け入れ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・国内企業インターンシップ打合せ旅費	100		100	
	・				
	・				
	・				
	[その他]	6,720		6,720	
	①外注費	400		400	
	・ホームページ更新	200		200	
	・プロジェクトビデオ制作	200		200	
	・				
	②印刷製本費	200		200	
	・プロジェクト中間報告レポート印刷	200		200	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	120		120	
	・IECオフィス用通信費 @10,000*12月	120		120	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	⑥その他(諸経費)	6,000		6,000	
	・学生派遣支援 @120,000*25人	3,000		3,000	
	・学生受入支援 @120,000*25人	3,000		3,000	
	・				
平成32年度	合計	20,250	3,000	23,250	

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

(前ページの続き)

＜平成33年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	295		295	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	295		295	
	・グループ・プロジェクト・ソフトウェア	200		200	
	・ポスター印刷用紙等	95		95	
	・				
	[人件費・謝金]	5,710	3,000	8,710	
	①人件費	4,800	3,000	7,800	
	・IECオフィス研究員雇用 @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・プログラムコーディネーター @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・非常勤職員雇用 @250,000/月*12		3,000	3,000	
	②謝金	910		910	
	・非常勤講師等謝金 @6,500*20h*4名	520		520	
	・外国招聘教員講演 @6,500*20h*3名	390		390	
	・				
	[旅費]	6,500		6,500	
	・4校との打合せ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・COIL +VIP教員受け入れ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・国内企業インターンシップ打合せ旅費	100		100	
	・				
	・				
	・				
	[その他]	5,720		5,720	
	①外注費	400		400	
	・ホームページ更新	200		200	
	・プロジェクトビデオ制作	200		200	
	・				
	②印刷製本費	200		200	
	・プロジェクト中間報告レポート印刷	200		200	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	120		120	
	・IECオフィス用通信費 @10,000*12月	120		120	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	5,000		5,000	
	・学生派遣支援 @100,000*25人	2,500		2,500	
	・学生受入支援 @100,000*25人	2,500		2,500	
	・				
平成33年度	合計	18,225	3,000	21,225	

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

(前ページの続き)

＜平成34年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	312		312	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	312		312	
	・グループ・プロジェクト・ソフトウェア	200		200	
	・ポスター印刷用紙等	112		112	
	・				
	[人件費・謝金]	5,320	3,000	8,320	
	①人件費	4,800	3,000	7,800	
	・IECオフィス研究員雇用 @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・プログラムコーディネーター @200,000/月*12	2,400		2,400	
	・非常勤職員雇用 @250,000/月*12		3,000	3,000	
	②謝金	520		520	
	・非常勤講師等謝金 @6,500*20h*4名	520		520	
	・				
	[旅費]	4,800		4,800	
	・4校との打合せ @400,000*8名	3,200		3,200	
	・COIL +VIP教員受け入れ @400,000*4名	1,600		1,600	
	・				
	・				
	・				
	・				
	[その他]	5,970		5,970	
	①外注費	400		400	
	・ホームページ更新	200		200	
	・プロジェクトビデオ制作	200		200	
	・				
	②印刷製本費	700		700	
	・プロジェクト中間報告レポート印刷	700		700	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	120		120	
	・IECオフィス用通信費 @10,000*12月	120		120	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	4,750		4,750	
	・学生派遣支援 @95,000*25人	2,375		2,375	
	・学生受入支援 @95,000*25人	2,375		2,375	
	・				
平成34年度	合計	16,402	3,000	19,402	

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】			
①交流プログラムを実施する相手大学の概要			
大 学 名 称	(日) アラバマ大学	国名	米国
	(英) The University of Alabama		
設 置 形 態	州立大学	設 置 年	1820年
設 置 者 (学 長 等)	Stuart R. Bell		
学 部 等 の 構 成	College of Arts and Sciences College of Communication and Information Sciences College of Community Health Sciences College of Continuing Studies Culverhouse College of Commerce College of Education College of Engineering Graduate School Honors College School of Human Environmental Sciences Law School Capstone College of Nursing School of Social Work		
学 生 数	総数	38,563人	学部生数 33,305人 大学院生数 5,258人
受け入れている留学生数	3%	日本からの留学生数	不明
海外への派遣学生数	不明	日本への派遣学生数	不明
Webサイト(URL)	https://www.ua.edu/		
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。			
Southern Association of Colleges and Schools Commission on Colleges (SACSCOC) 1866 Southern Lane, Decatur, GA 30033-4097 (404-679-4501) http://services.graduate.ua.edu/apr/accredsummary.pdf			

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) シンシナティ大学		国名	米国
	(英) University of Cincinnati			
設 置 形 態	公立大学	設 置 年	1819年	
設 置 者 (学 長 等)	Neville Pinto			
学 部 等 の 構 成	McMicken College of Arts and Sciences、College of Allied Health Sciences Carl H. Lindner College of Business、UC Clermont College College-Conservatory of Music、College of Design, Architecture, Art & Planning College of Education, Criminal Justice, and Human Services College of Engineering & Applied Science、College of Law College of Medicine、College of Nursing、James L. Winkle College of Pharmacy、UC Blue Ash College、Graduate School			
学 生 数	総数	44,783人	学部生数	34,187人
			大学院生数	10,596人
受け入れている留学生数	3447人	日本からの留学生数	不明	
海外への派遣学生数	不明	日本への派遣学生数	不明	
Webサイト(URL)	http://www.uc.edu/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
The University of Cincinnati and all regional campuses are accredited by the Higher Learning Commission (HLC).				
The University of Cincinnati is an Ohio Public Institution, and each of its programs are approved by the Ohio Department of Higher Education (ODHE).				
http://www.uc.edu/about/accreditation.html				

(大学名: 千葉大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) ニュースクール大学		国名	米国
	(英) The New School			
設 置 形 態	私立大学	設 置 年	1919年	
設 置 者 (学 長 等)	David E. Van Zandt			
学 部 等 の 構 成	Eugene Lang College The New School for Liberal Arts Mannes College The New School for Music The New School for Drama The New School for Jazz and Contemporary Music The New School for Public Engagement The New School for Social Research Parsons The New School for Design			
学 生 数	総数	10,547人	学部生数	6,835人
	大学院生数	3,712人		
受け入れている留学生数	25%	日本からの留学生数	不明	
海外への派遣学生数	不明	日本への派遣学生数	不明	
Webサイト(URL)	https://www.newschool.edu/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
<p>The New School is accredited by the Middle States Commission on Higher Education (MSCHE, 3624 Market Street, 2nd Floor West, Philadelphia, PA 19104; 216.284.5000). MSCHE is a regional accreditor and federally recognized body. The New School has been accredited by MSCHE since 1960. All degree programs at the New York City campus of The New School are registered by the New York State Department of Education (NYSED, 89 Washington Avenue, Albany, New York 12234; 518.474.1551). Both NYSED and MSCHE provide assurance to students, parents, and all stakeholders that The New School meets clear quality standards for educational and financial performance.</p> <p>https://www.newschool.edu/Components/Wireframes/TwoColumnWireframe.aspx?pageid=331</p>				

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) ストローニーブルック大学		国名	米国
	(英) Stony Brook University			
設 置 形 態	州立大学	設 置 年	1957年	
設 置 者 (学 長 等)	Samuel L. Stanley Jr			
学 部 等 の 構 成	College of Arts and Sciences College of Business College of Engineering and Applied Sciences Graduate School School of Dental Medicine School of Health Technology and Management School of Journalism School of Marine & Atmospheric Sciences School of Medicine School of Nursing School of Pharmacy & Pharmaceutical Sciences School of Professional Development School of Social Welfare			
学 生 数	総数	25,989人	学部生数	17,364人
			大学院生数	8,625人
受け入れている留学生数	2,574人(学部生のみ)	日本からの留学生数	不明	
海外への派遣学生数	不明	日本への派遣学生数	不明	
Webサイト(URL)	http://www.stonybrook.edu/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
<p>As a member of the Middle States Association (MSA), Stony Brook University is accredited according to the guidelines and standards set forth by the MSA, Commission on Higher Education (CHE), and subject to a self-study and peer review on a decennial basis.</p> <p>http://www.stonybrook.edu/commcms/middlestates/accreditation/overview.html</p>				

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

参考データ【国内の大学等1校につき、①～③は枠内に記入、④～⑥はそれぞれ指定ページ以内】
 ※人数等の算定に当たっては、原則として「学校基本調査」による定義に基づき記入。

大学等名	千葉大学
------	------

①大学等全体における出身国別の留学生の受入総数(平成29年5月1日現在)及び各出身国(地域)別の平成29年度の留学生受入人数

※「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表1に定める「留学」の在留資格を有する者に限る。

※「平成29年度受入人数」は、平成29年4月1日～平成30年3月31日の出身国(地域)別受入人数を記入。

※「全学生数」には、日本人学生及び外国人留学生を含めた大学等全体の平成29年5月1日現在の在籍者数を記入。

順位	出身国(地域)	受入総数	平成29年度受入人数
1	中国	473	680
2	韓国	93	121
3	インドネシア	54	64
4	台湾	25	38
5	タイ	20	36
6	マレーシア	15	15
7	メキシコ	14	25
8	モンゴル	10	10
9	ベトナム	9	10
9	ドイツ	9	24
その他 (上記10カ国以外)	(主な国名) インド、ロシア他	108	176
留学生の受入人数の合計		830	1,199
全学生数		14,649	
留学生比率		5.7%	

②平成29年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数

※教育又は研究等を目的として、平成29年度中(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)に海外の大学等(海外に所在する日本の大学等の分校は除く。)に留学した日本人学生について記入。

なお、平成29年3月31日以前から継続して留学している者は含まない。

順位	派遣先大学の所在国(地域)	派遣先大学名	平成29年度派遣人数
1	タイ	マヒドン大学	82
2	アメリカ	アラバマ大学(タスカルーサ校)	49
3	カナダ	アルバータ大学	31
4	インドネシア	インドネシア大学	28
5	オーストラリア	モナシュ大学	27
6	台湾	国立台湾大学	24
7	タイ	チェンマイ大学	21
8	イギリス	ボーンマス美術大学	20
9	韓国	延世大学	18
10	韓国	ソウル国立大学	15
その他 (上記10校以外)	(主な国名) 中国、メキシコ、英国	(主な大学名) 清華大学、モンテレイ大学、シェフィールド大学	431
	計 33 カ国	計 149 校	
派遣先大学合計校数		159	
派遣人数の合計			746

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	千葉大学						
③大学等全体における外国人教員数(兼務者を含む)(平成29年5月1日現在)							
※「全教員数」には大学等に在籍する日本人教員も含めた全教員数を記入。							
※「うち専任教員(本務者)数」には教授、准教授、講師、助教、助手の専任の外国人教員の数をそれぞれ記入。 (いずれにも当てはまらない場合には、「助手」に含めること。)							
全教員数	外国人教員数						外国人教員の比率
	教授	准教授	講師	助教	助手	合計	
2518	12	11	57	51	0	131	5%
うち専任教員 (本務者)数	11	11	6	29	0	57	

大学等名	千葉大学
------	------

④取組の実績 【4ページ以内】

○国際的な教育環境の構築に関して、本学では5つの研究科などで合計18の英語による教育プログラムを実施している。

【英語プログラム一覧】

研究科等	課程	プログラム名	開始年度
園芸学研究科	博士前期課程	アジア環境園芸学エキスパートプログラム	21年度
融合理工学府先進理化学専攻物質科学コース	博士前期課程	ナノ・イメージング国際融合プログラム	21年度
看護学研究科	博士前期課程	国際プログラム	24年度
融合理工学府	博士前期課程	IDEA Program (Innovation Design Education Advanced (IDEA) Program)	25年度
融合理工学府創成工学専攻デザインコース	博士前期課程	PULI Program (Post Urban Living Innovation Program)	26年度
融合理工学府創成工学専攻デザインコース	博士前期課程	千葉大学・ケルン応用科学大学ダブルディグリープログラム	28年度
融合理工学府	博士前期課程	CAPE Program (Campus Asis Plant & Environment Innovation Program)	28年度
融合理工学府創成工学専攻デザインコース	博士前期課程	FARM Program (Future Agriculture with Fae east Russia Pre-Master to PhD Program)	29年度
人文公共学府	博士前期課程	Economics in English コース	29年度
園芸学研究科	博士後期課程	環境園芸学国際プログラム	20年度
融合理工学府先進理化学専攻物質科学コース	博士後期課程	先進国際プログラム	21年度
医学薬学府	4年博士課程	先進医学薬学国際プログラム	23年度
融合理工学府創成工学専攻デザインコース	博士後期課程	MADEプログラム(Master of Asia Design Education Program)	25年度
融合理工学府	博士後期課程	IDEA Program (Innovation Design Education Advanced (IDEA) Program)	25年度
看護学研究科	博士後期課程	国際プログラム	26年度
融合理工学府創成工学専攻デザインコース	博士後期課程	PULI Program (Post Urban Living Innovation Program)	26年度
融合理工学府	博士後期課程	CAPE Program (Campus Asis Plant & Environment Innovation Program)	28年度
融合理工学府創成工学専攻デザインコース	博士後期課程	FARM Program (Future Agriculture with Fae east Russia Pre-Master to PhD Program)	29年度

また、中国、インドネシア、タイ、イタリア及びドイツの5ヶ国22大学との間で35のダブルディグリー・プログラムを実施している。 【ダブル・ディグリープログラム一覧】

国名	No.	相手先大学名・部局名	千葉大学部局名	研究分野	学位		協定締結年度
					修士	博士	
中国	1	清華大学 建築学院	園芸学研究科	園芸学	○		2008
	2	上海交通大学 媒体設計学院 (メディアデザイン学部)	工学研究科 デザイン科学専攻	デザイン	○		2009
	3	上海交通大学研究生院 船舶海洋建築工学院、生物医学工程学院、電子情報電気工程学院	工学研究科 人工システム科学専攻 融合理工学府 基幹工学専攻	ロボティクス		○	2009
	4	上海交通大学農業生物学院	園芸学研究科	園芸学	○	○	2011
	5	浙江大学 コンピューター学院	工学研究科 融合理工学府 創成工学専攻	デザイン	○		2011
	6	浙江大学 国際デザイン学院	工学研究科	デザイン	○		2011
	7	浙江大学 コンピュータサイエンス学院	融合理工学府	デザイン	○		2017
	8	電子科技大学 電子工学院	工学研究科	電子工学		○	2014
	9	南京農業大学	園芸学研究科	園芸学	○		2015
	10	南京芸術学院 工業デザイン学院	工学研究科	デザイン	○		2016
	11	北京林業大学 園林学院	園芸学研究科	園芸学	○		2016
インドネシア	12	ボゴール農科大学 農学部	園芸学研究科	園芸学	○		2010
	13	インドネシア大学 工学部、理学部	工学研究科、融合科学研究科、環境リモートセンシング研究センター	医工学 /リモートセンシング	○	○	2012
	14	ウダヤナ大学 大学院プログラム	融合科学研究科、環境リモートセンシング研究センター	リモートセンシング	○	○	2012
	15	ガジャマダ大学 地理学部	融合科学研究科、環境リモートセンシング研究センター	リモートセンシング	○	○	2012
	16	ハサスディン大学 理学部、環境研究センター	融合科学研究科、環境リモートセンシング研究センター	リモートセンシング	○	○	2012
	17	バンドン工科大学 デザイン学部、地球工学部、生命工学部	工学研究科、融合科学研究科、環境リモートセンシング研究センター	デザイン /リモートセンシング	○	○	2012
	18	パジャジャラン大学 理学部、農学部、農業工学部、環境学部	園芸学研究科、環境健康フィールド科学センター、融合科学研究科、環境リモートセンシング研究センター	園芸学 /リモートセンシング	○	○	2012
タイ	19	マヒドン大学 理学部、大学院	園芸学研究科	園芸学	○	○	D 2008 M 2016
	20	シルパコーン大学 薬学部	薬学研究院、医学薬学府	天然物化学		○	2012
	21	キングモンクット工科大学	園芸学研究科	園芸学		○	2014
	22	マヒドン大学 薬学部、大学院	医学薬学府(薬学領域)	薬学		○	2014
	23	タマサート大学 シリントーン国際工学部	工学研究科	医工学		○	2016
	24	チェンマイ大学	薬学研究院、医学薬学府(薬学領域)	薬学		○	2018
	25	メーファールアン大学 農工学部	園芸学研究科	園芸学	○		2016
リイ ア タ	26	フィレンツェ大学	人文社会科学研究科	イ列ア美術史		○	2013
ド イ	27	ケルン応用科学大学 文化科学研究科	融合理工学府	デザイン	○		2018

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	千葉大学
-------------	------

④取組の実績 【4ページ以内】

全学教育の面では、グローバル人材育成の一環として、平成25年度より「国際日本学」と呼ばれる科目群を設定し、留学生と協働して学ぶ科目を多数設定したほか、海外の協定校の学生と特定の課題について協働で学ぶPBL型の短期プログラム「グローバル・スタディ・プログラム」(GSP)を開始し、マレーシア、フィンランド、ベトナム、ギリシャ及びドイツの協定大学の学生との協働学習を推進するなど、国際的な教育環境の構築に努めている。

【グローバル・スタディ・プログラム実績】

大学名	2011年度		2012年度		2013年度		2014年度		2015年度		2016年度		2017年度	
	本学から	先方から												
フィンランド・セイナヨキ応用科学大学(派遣)	10	9			13	8			14	7			15	13
ベトナム・ノンラム大学(派遣)					11	11								
マレーシア・マラヤ大学(派遣)					14	0								
ギリシャ・アリストテレス大学(派遣)							13	14			17	14		
マレーシア・マルチメディア大学(派遣)							13	14			8	5		
ドイツ・ドレスデン応用科学大学(派遣)											20	12		
フィンランド・セイナヨキ応用科学大学(受入)			15	14			12	15			12	16		
ギリシャ・アリストテレス大学(受入)									13	15			11	13
マレーシア・マルチメディア大学(受入)									15	15			4	10
ドイツ・ドレスデン応用科学大学(受入)													11	14
計	10	9	15	14	38	19	38	43	42	37	57	47	41	50

○本学は外国人教員の雇用を積極的に進めており、平成29年5月1日現在で131名の教員(全教員(特任教員及び非常勤講師含む)の5.0%)が在籍している。国際的な教育研究の経験を有する日本人教員については、平成29年5月1日現在で61名の常勤教員が、海外の大学で学位を取得している(常勤教員(1,370名)の4.5%)。

教員の国際公募については、全学的に統一した制度を導入しては無いが、一部の学部・研究科において実施されており、公募情報を英文により学外ホームページに掲載している。また、年俸制については平成26年10月に全学で導入しており、平成29年5月1日現在、16部局において119名に適用している。今後、平成33年度までに、171名(総教員数の15%程度)を目標に対象者を広げていく予定である。

テニュアトラック制については、平成20年度に生命系科学分野に限定して導入し、平成22年度には大学自主取組の制度として全学規程に定め導入した。平成29年度までに47名がテニュアトラック教員として雇用された。

FD活動に関しては、全学レベル、部局レベルの双方で様々な分野のFD活動を活発に実施しており、その中で国際化に関するものは、平成25年度は6件、平成26年度は2件、平成27年度は3件、平成28年度は2件、平成29年度は5件実施された。

【国際化に対応するFD実施状況一覧】

年度	FD種別	テーマ	参加人数
H25	融合科学研究科FD	情報科学専攻での国際学生ワークショップの活動報告	30名
H25	教育学部FD	「平成25年度教育学部・教育学研究科FD研修会」(ツインクルプログラム)	103名
H25	文学部FD	留学生チューターへの研修	12名
H25	普遍教育FD 全学FD	「グローバルインターンシップ・ボランティアの現状と課題」	25名
H25	工学部・工学研究科 融合科学研究科FD	米国留学体験記	20名
H25	全学FD	スキップワイズプログラム国際FD	14名
H26	文学部・法政経学部FD	留学生チューターへの研修	12名
H26	全学FD	スキップワイズプログラム国際FD	18名
H27	工学部・工学研究科 融合科学研究科FD	米国の教育事情に関する研修	19名
H27	理学部・理学研究科FD	留学生の英語論文指導に関する研修	14名
H27	全学FD	スキップワイズプログラム国際FD	16名
H28	全学FD	TOEIC S&W Propelワークショップ	5名
H28	全学FD	スキップワイズプログラム教員向け英語研修	27名
H29	国際教養学部FD	学生の留学指導に関わる専任教員の研修(1)	27名
H29	国際教養学部FD	学生の留学指導に関わる専任教員の研修(2)	31名
H29	看護学部・看護学研究科FD	英語による講義やプレゼンテーションセミナー	12名
H29	全学FD	英語授業を行うための教員向け英語講義実践研修(第1回)	21名
H29	全学FD	英語授業を行うための教員向け英語講義実践研修(第2回)	24名

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

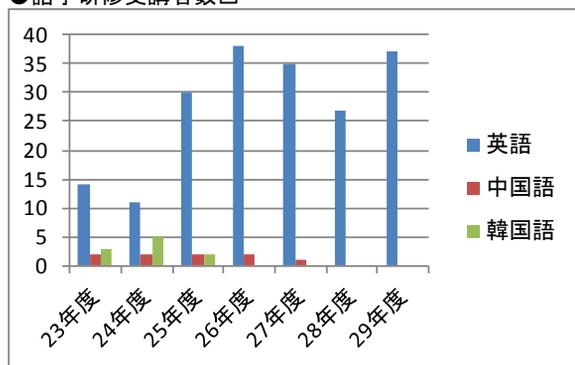
大学等名	千葉大学
-------------	------

④取組の実績 【4ページ以内】

○事務体制の国際化については、従前より海外大学等との協定締結等を担当する部署として国際企画課を設置し、常勤職員6名、特任専門職員1名、非常勤職員4名を配置していたが、国際的競争力強化のため事務組織の見直しを図り、平成28年度から国際企画課内に海外キャンパス推進事務室を設置し、各部署に配置している国際化担当職員（国際企画課での勤務経験を有する者）を兼務させ、事務体制を強化した。また、平成22年度から留学生窓口のワンストップ化を実現するため、インターナショナル・サポート・デスク（ISD）を西千葉、亥鼻及び松戸キャンパスに設置し、各1名を配置している。更に、英語のできる国際担当職員として、任期付きの特任専門職員として雇用していた者を承継職員として再雇用し、留学生課及びスーパーグローバル大学事業推進事務室に1名ずつ配置し体制の強化を図った。

海外の大学との交流、外国人研究者、留学生への対応を担う事務スタッフの質的向上、量的拡大を図ることを目的として、平成29年度は、語学学校を活用した語学研修（英語）、語学検定試験（TOEIC-IP試験等）を実施し、職員の語学力の向上に努めた。また、海外派遣研修（短期研修）を実施し、ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）に2名、マヒドン大学（タイ）に2名派遣、さらに、オーストラリア国立大学をはじめとする複数の大学との交流をはかる日豪大学職員短期交流研修に1名派遣するなど、海外の大学との交流を通じて、グローバル化に対応する職員の育成に取り組んだ。これら研修修了者は本部のみならず、各部署の事務部門に多く在籍しており、本事業のバックアップ体制は十分に整っている。

●語学研修受講者数口



	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
英語	14	11	30	38	35	27	37
中国語	2	2	2	2	1	0	0
韓国語	3	5	2	0	0	0	0

●海外派遣研修(短期) 受講者数口

年度	派遣先	人数
24	イギリス	5名
	フィンランド	5名
25	イギリス	4名
	フィンランド	3名
26	韓国	2名
	タイ	5名
	台湾	1名
27	インドネシア	1名
	韓国	1名
	タイ	2名
	オーストラリア	1名
28	オーストラリア	2名
	タイ	4名
29	タイ	2名
	オーストラリア	3名

※派遣期間は概ね10日間程度

○成績管理については、GPA制度を導入することにより、学生に対するきめ細やかな履修指導、学生自身による学習習熟度の把握等に活用している。また、一部の学部・学科では、合わせて履修可能な上限単位の設定を行い、早期卒業制度を導入している。

シラバスに各回の授業内容、目的・目標、評価方法・基準等を記載し、WEBで公開する等の方法で学生に周知徹底を図ることで、体系的な学習指導に役立てている。また、教育の質を保証するとともに、学生の立場に立った教育課程の体系化を進める仕組みとして、平成27年度より「コース・ナンバリング・システム」を全学的に導入するとともに、「カリキュラムツリー」を作成した。

これらの他、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを全学単位及び各学部・研究科単位で作成し、教育課程の内容、卒業・終了時の到達目標を設定することで、教育内容の質の確保を行っており、これら3つのポリシーは平成28年3月に中教審から示されたガイドラインをもとにさらに検討し、平成29年度に見直しを行った。

大学等名	千葉大学												
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】 ※事後評価結果を貼付してください。													
<p>大学の世界展開力強化事業（平成24年度選定）事後評価結果</p> <table border="1"> <tr> <td>大学名</td> <td>千葉大学</td> </tr> <tr> <td>整理番号</td> <td>II-1</td> </tr> <tr> <td>事業名</td> <td>ツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）</td> </tr> </table> <p>◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価</p> <table border="1"> <tr> <td>(総括評価)</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">S</td> <td>取組状況、目標の達成状況ともに事業計画を上回る成果をあげており、事業目的は十分に実現された。</td> </tr> <tr> <td>(コメント)</td> <td> <p>本事業は、教育系の学生と理系の学生が協働して SEND プログラムに参加することにより、グローバルな教育能力と視点を持つ教育者と、教育マインドを持つグローバルな研究者を育成・開発するという意欲的な取組として実施された事業である。</p> <p>事業展開では、プログラムの実施によって、連携する ASEAN 諸国の小・中・高等学校の学生の日本理解と関心が高まり、留学への意欲に繋がる好循環が効果的に構築されている。受け入れた学生のほぼ全員が千葉大学へ更なる留学希望を示している点は、魅力ある取組であることの確たる証左と認められ、我が国と ASEAN 諸国の架け橋となる人材育成を行う事業として高く評価する。また、充実したツインクルオフィス体制やWメンターによる指導制度によって質の保証がなされている点に加え、具体的で実効的なカリキュラムが十分に練られ、新たな教育プログラムの構築も精力的に進められた。更に、相手大学及び高校教員による指導・評価システムを開発したことにより、派遣先大学の教員による評価・単位認定を可能とする体制の確立と実績が認められる。</p> <p>このほかにも、相手大学及び高校関係者との定期的なツインクルコンソーシアム会議体制を確立し、事業の円滑な遂行に努めていることは、今後の継続性を担保する点で評価できる。学生の交流数は、派遣は目標をやや下回ったものの、派遣・受入ともに充実した学生交流が行われており、派遣学生のサポートを受入学生が担うなど、双方の学生間による効果的な支援体制が整備されていることによって、質・量ともに十分な成果を挙げている。また、インドネシア及びタイにおいては関連省庁の支援を得るなど、各種関係機関と綿密な関係を構築している。</p> <p>一方で、外国語力スタンダードは全体の平均点数では目標達成に至らなかったことから、引き続き注力されることが望まれる。</p> <p>最後に、千葉大学の中長期的なビジョンを着実に実行し、ツインクルプログラムの全国的な展開と、初等中等教育を通じた教育と研究の両面からの訓練及び協調による国際交流活動がグローバルな研究者の育成にもたらした有効性について検証することを期待する。</p> </td> </tr> </table>		大学名	千葉大学	整理番号	II-1	事業名	ツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）	(総括評価)		S	取組状況、目標の達成状況ともに事業計画を上回る成果をあげており、事業目的は十分に実現された。	(コメント)	<p>本事業は、教育系の学生と理系の学生が協働して SEND プログラムに参加することにより、グローバルな教育能力と視点を持つ教育者と、教育マインドを持つグローバルな研究者を育成・開発するという意欲的な取組として実施された事業である。</p> <p>事業展開では、プログラムの実施によって、連携する ASEAN 諸国の小・中・高等学校の学生の日本理解と関心が高まり、留学への意欲に繋がる好循環が効果的に構築されている。受け入れた学生のほぼ全員が千葉大学へ更なる留学希望を示している点は、魅力ある取組であることの確たる証左と認められ、我が国と ASEAN 諸国の架け橋となる人材育成を行う事業として高く評価する。また、充実したツインクルオフィス体制やWメンターによる指導制度によって質の保証がなされている点に加え、具体的で実効的なカリキュラムが十分に練られ、新たな教育プログラムの構築も精力的に進められた。更に、相手大学及び高校教員による指導・評価システムを開発したことにより、派遣先大学の教員による評価・単位認定を可能とする体制の確立と実績が認められる。</p> <p>このほかにも、相手大学及び高校関係者との定期的なツインクルコンソーシアム会議体制を確立し、事業の円滑な遂行に努めていることは、今後の継続性を担保する点で評価できる。学生の交流数は、派遣は目標をやや下回ったものの、派遣・受入ともに充実した学生交流が行われており、派遣学生のサポートを受入学生が担うなど、双方の学生間による効果的な支援体制が整備されていることによって、質・量ともに十分な成果を挙げている。また、インドネシア及びタイにおいては関連省庁の支援を得るなど、各種関係機関と綿密な関係を構築している。</p> <p>一方で、外国語力スタンダードは全体の平均点数では目標達成に至らなかったことから、引き続き注力されることが望まれる。</p> <p>最後に、千葉大学の中長期的なビジョンを着実に実行し、ツインクルプログラムの全国的な展開と、初等中等教育を通じた教育と研究の両面からの訓練及び協調による国際交流活動がグローバルな研究者の育成にもたらした有効性について検証することを期待する。</p>
大学名	千葉大学												
整理番号	II-1												
事業名	ツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）												
(総括評価)													
S	取組状況、目標の達成状況ともに事業計画を上回る成果をあげており、事業目的は十分に実現された。												
(コメント)	<p>本事業は、教育系の学生と理系の学生が協働して SEND プログラムに参加することにより、グローバルな教育能力と視点を持つ教育者と、教育マインドを持つグローバルな研究者を育成・開発するという意欲的な取組として実施された事業である。</p> <p>事業展開では、プログラムの実施によって、連携する ASEAN 諸国の小・中・高等学校の学生の日本理解と関心が高まり、留学への意欲に繋がる好循環が効果的に構築されている。受け入れた学生のほぼ全員が千葉大学へ更なる留学希望を示している点は、魅力ある取組であることの確たる証左と認められ、我が国と ASEAN 諸国の架け橋となる人材育成を行う事業として高く評価する。また、充実したツインクルオフィス体制やWメンターによる指導制度によって質の保証がなされている点に加え、具体的で実効的なカリキュラムが十分に練られ、新たな教育プログラムの構築も精力的に進められた。更に、相手大学及び高校教員による指導・評価システムを開発したことにより、派遣先大学の教員による評価・単位認定を可能とする体制の確立と実績が認められる。</p> <p>このほかにも、相手大学及び高校関係者との定期的なツインクルコンソーシアム会議体制を確立し、事業の円滑な遂行に努めていることは、今後の継続性を担保する点で評価できる。学生の交流数は、派遣は目標をやや下回ったものの、派遣・受入ともに充実した学生交流が行われており、派遣学生のサポートを受入学生が担うなど、双方の学生間による効果的な支援体制が整備されていることによって、質・量ともに十分な成果を挙げている。また、インドネシア及びタイにおいては関連省庁の支援を得るなど、各種関係機関と綿密な関係を構築している。</p> <p>一方で、外国語力スタンダードは全体の平均点数では目標達成に至らなかったことから、引き続き注力されることが望まれる。</p> <p>最後に、千葉大学の中長期的なビジョンを着実に実行し、ツインクルプログラムの全国的な展開と、初等中等教育を通じた教育と研究の両面からの訓練及び協調による国際交流活動がグローバルな研究者の育成にもたらした有効性について検証することを期待する。</p>												

(大学名:千葉大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	千葉大学		
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】			
※事後評価結果を貼付してください。			
大学間連携共同教育推進事業 事後評価結果			
連携の種類	地域連携	整理番号	4
取組名称	実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム		
連携校 <small>※下線部は代表校</small>	千葉大学、城西国際大学、千葉科学大学		
大学間連携共同教育推進事業評価委員会による評価			
【総括評価】			
S：計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。			
【コメント】			
【教育プログラムの構築について】			
本取組では、連携3大学それぞれの教育資源を生かした5つのプログラムをeラーニングや、アクティブ・ラーニングを柱にして実施した。本プログラムは、薬剤師が医療現場で今後求められるフィジカルアセスメント能力の向上、距離的に離れた学生の授業参加も促したりするなど、「主体的に考え、行動できる薬剤師」の育成に向けて、実践的な薬学教育が実現できている点は高く評価できる。また、プレ・ポストテストや各演習における実施前後の知識評価から、学生の理解度や知識の向上も確認できており、質保証システムとしても高く評価できる。			
【連携・実施体制の構築について】			
連携3大学の薬学部長、統合運営委員会、成績評価委員会からなる事業運営会議によるマネジメント体制が確立されており、評価できる。各連携校においても、学長のリーダーシップの下、マネジメント体制を確立することができており、評価できる。また、ステークホルダーとも多彩な活動で協働が行われており、高く評価できる。外部評価の体制が適切に構築され、評価結果に基づき改善も行われている点も評価できる。			
【成果の活用と今後の展望について】			
成果は極めてアクティブで効果的な動きで波及に努められており、その結果、ステークホルダーからの講演依頼等も増え、他大学との薬学部連携が進んだ点が高く評価できる。補助期間終了後の継続体制や資金計画も実効性が高く、今後の更なる発展が期待できる。			

大学等名	千葉大学		
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】 ※事後評価結果を貼付してください。			
<p>がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 取組概要及び最終評価結果</p>			
			整理番号
			3
大学名	筑波大学、千葉大学、群馬大学、埼玉医科大学、日本医科大学、獨協医科大学、茨城県立医療大学、群馬県立県民健康科学大学 (計8大学)		
取組名	国際協力型 がん臨床指導者 養成拠点		
事業推進責任者	筑波大学 医学医療系 消化器外科 教授 大河内信弘		
取組の概要			
<p>本拠点はグローバル化が進むがん医療において、大学間、学部間の壁を越えた連携教育環境の構築に尽力した。筑波大の陽子線、群馬大の重粒子線センターが連携し、世界的にも例を見ない強力な放射線治療の教育養成拠点を形成した。大学間連携セミナー（74回）と国際重粒子線がん治療研修コース（3回）も開催し、放射線腫瘍医37名、医学物理士57名の大学院生を養成に繋がった。独自に開発したe-learningソフトウェア（文部科学大臣賞受賞）が可能にする、がんプロ拠点の枠を越えた連携教育にも積極的に取り組んだ。全14拠点93大学からの1862コンテンツを7412名のユーザに公開し、10万時間を超える学習機会を提供した。医歯薬看の分野横断的研究活動は、英文論文2編の出版という具体的な成果まで完結させた。本事業における教育の共同実施の成果として、目標値（399名）を超える435名のがん専門医療人を大学院で養成した。</p>			
最終評価結果			
<p>(総合評価) S 教育の活性化が大いに促進され、がん専門医療人の養成が大いに推進された。</p>			
<p>推進委員会からのコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等</p>			
<p>○全国の93大学で利用されている「全国e-learningクラウド」を構築・運営し、全国的ながん医療人養成の底上げに寄与するなど、大きな成果を上げている。 ○特化させた講座や横断的講座、大学間多職種連携、地域との連携などユニークな観点を持ち、ほとんどの目標が達成されている。 ○本事業に係る成果等を積極的に発信しており、特に大学院生が主体的に参画し制作した市民向けの説明動画は延べ33,666回視聴されるなどの成果を上げている。 ○市民との連携や学校教育における教育プログラムを開発するなど、がん医療の知識普及と相互理解に努力している。 ●今後のe-learningに係る維持方策、他大学との協働等のビジョンについて、明確化する必要がある。 ●地域医療との連携が十分とは言えない。 ●各大学における成果は認めるが、グループ全体としての成果が見えにくい。 ●プログラムの達成不十分な点等について、どのように改善したのか具体的な提示が望まれる。 ●インテンシブコースの受け入れ、FDの活動が比較的低調となっている。また、各教育コースの継続について不安な点が残されている。</p>			

大学等名	千葉大学
⑥他の公的資金との重複状況【2ページ以内】	
<p>※当該申請大学等において、今回申請している内容以外に、文部科学省が行っている大学改革推進等補助金、研究拠点形成費等補助金等、国際化拠点整備事業費補助金又は独立行政法人日本学術振興会が行っている国際交流事業の補助金等による経費措置を受けている取組がある場合、また、現在申請を予定している取組(大学教育再生加速プログラム等)がある場合は、それらの事業名称及び取組内容について、1事業につき3～4行程度を目安に記入すること。その中で、今回の申請内容と類似しているものがある場合には、その相違点についても言及すること。</p> <p>また、独立行政法人日本学生支援機構平成30年度海外留学支援制度(協定派遣・協定受入)に選定されたプログラムがある場合には、本事業の申請内容との関連について必ず明記すること。</p>	
<p>【博士課程教育リーディングプログラム】 ○「免疫システム調整治療学推進リーダー養成プログラム」(平成24～30年度) 難治性の免疫関連疾患(アレルギー、自己免疫疾患、癌、心血管疾患など)に特化した「治療学」の推進リーダーを養成するプログラムを、医学と薬学が融合した大学院医学薬学府博士課程に組織し、領域横断教育と産学官連携によりグローバル社会で活躍する実践的なリーダーを育成する。</p> <p>○「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」(平成24～30年度) 人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、学際的・国際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組む。</p> <p>【地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)】 ○「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の”しごと”づくり人材育成事業」(平成27～31年度) 千葉県のうち若者の人口流出している地域を千葉地方圏(事業協働地域)とし、千葉大学、参加大学、協力校、地方公共団体、地元企業、NPO等とが事業協働機関として協働して、千葉地方圏の地域産業である農林水産、観光、メディカル連携等の分野において共同研究、技術移転により産業振興を図るとともに、そのイノベーションを進める人材育成を推進する。</p> <p>【大学教育再生加速プログラム】 ○「高大連携での科学教育コンソーシアムによる「次世代才能スキップアップ」グローバル理系人養成プログラム」(平成26～31年度) これまで17年間にわたり取り組んできた「先進科学プログラム」を拡大するとともに、千葉県・千葉市教育委員会や県内のSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)と連携し、高校生段階から才能ある生徒を対象として、大学教養レベルの理系教育を実施する。</p> <p>【基礎研究医養成活性化プログラム】 ○病理・法医学教育イノベーションハブの構築(平成29～33年度) 千葉・群馬・山梨の三大学連携とその関連病院や部局をこえて行うOn-the-Job trainingの運営と教育プログラム修了者のポジション確保を、三大学連携のマイルストーンとし、基礎と臨床医学の知識・先端技術の取得を通じて、基礎医学の成果を臨床へトランスレーションする際のリーダーとなる病理・法医学研究医育成を行う。</p> <p>【課題解決型高度医療人材養成プログラム】 ○病院経営スペシャリスト養成プログラム(平成29～33年度) 実務能力に長けた講師陣が、医師を中心に、コメディカルや事務職、地域医療政策を担う自治体職員など将来の病院運営を担う者を対象とし、DPC/PDPS制度に基づく病院経営指標の管理やコストの適正化、診療内容の最適化・質向上といった実践的な学習内容を提供し、病院経営のスペシャリストを養成・輩出する。</p> <p>【スーパーグローバル大学等事業】 ○「グローバル千葉大学の新生-Rising Chiba University-」(平成26～35年度) グローバル人材に必要とされる「人間力」として、「俯瞰力」、「発見力」、そして「実践力」を取り上げ、それらの育成に特化した教育プログラムを新たに準備し、さらに、これらの人間力の育成を各学生にテーラーメイドで行うために、SULA(Super University Learning Administrator)という新しい教育人材を配置する。このような人間力を身に付けたグローバル人材の育成に向けて、千葉大学を新生させる覚悟で改革を進める。</p>	

大学等名	千葉大学
⑥他の公的資金との重複状況【2ページ以内】	
<p>※当該申請大学等において、今回申請している内容以外に、文部科学省が行っている大学改革推進等補助金、研究拠点形成費等補助金等、国際化拠点整備事業費補助金又は独立行政法人日本学術振興会が行っている国際交流事業の補助金等による経費措置を受けている取組がある場合、また、現在申請を予定している取組(大学教育再生加速プログラム等)がある場合は、それらの事業名称及び取組内容について、1事業につき3～4行程度を目安に記入すること。その中で、今回の申請内容と類似しているものがある場合には、その相違点についても言及すること。</p> <p>また、独立行政法人日本学生支援機構平成30年度海外留学支援制度(協定派遣・協定受入)に選定されたプログラムがある場合には、本事業の申請内容との関連について必ず明記すること。</p>	
<p>【大学の世界展開力強化事業】</p> <p>○「ポスト・アーバン・リビング・イノベーション・プログラム (PULI)」(平成27～31年度) 日本の学生が中米(メキシコ、パナマ)の学生とともに世界の都市圏が抱える課題を考え、未来の快適な都市を創造するプログラムである。文系・理系の人材が協働し企業と同じプロセスでプログラムを実施することにより、未来のリビング・イノベーションに資する文理混合の実践型人材を育成する。また、事業の成果を産業化させるため大学発ベンチャー企業の設立を目指す。</p> <p>○「植物環境イノベーションプログラム (CAPE)」(平成28～32年度) 植物環境に関わる産業は、第6次産業に第4次産業も加わり進化することが予測できるため、中国・韓国の3大学と連携し、園芸学(農学)と工学の両方の領域に長けた、植物環境のイノベーションを企画・提案・実施できる人材を育成する。</p> <p>○「極東ロシアの未来農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム (FARM)」(平成29～33年度) 我が国最大規模の植物工場を有する千葉大学環境健康フィールド科学センターを中心に、未来農業ビジネスの一つで先進型園芸施設である、人工光型植物工場、太陽光利用型植物工場の計画、生産から販売までのマネジメントに関わるプロフェッショナルな人材を日本とロシアが共同して育成する。</p> <p>【多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン】</p> <p>○関東がん専門医療人養成拠点(平成29～33年度) 連携8大学による“関東AYA希少がんセンターネットワーク”を教育拠点として整備し、がんゲノム医療、がんライフ・QOL医療の教育実践の場とする。</p> <p>【成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成(enPiT)】</p> <p>○ビッグデータ・AI・クラウド技術を用いた課題解決人材育成(平成28～32年度) 東日本・西日本に展開した10校の大学が中心になり、ベンダー・ユーザ企業の協力のもとで、教育プログラムを開発し実行する。また、これら以外にも広く参加校を募集して学部学生を教育すると共に、その教員に学部における実践的情報教育の知見を提供し、当該分野の学部教育の普及を目指す。</p> <p>平成30年度海外留学支援制度(協定派遣)に採択されたプログラムのうち、本事業の申請内容と関連性のあるものはない。</p>	